

旧上田藩上塩尻村における通婚圏の形成

—— 清水助五郎家文書送り状の分析 ——

高 橋 基 泰*

Abstract

This paper aims to elucidate the formation of the marriage sphere in the Ueda clan of Kami-shiojiri village in the first half of the 18th century. It focuses on the documents of religious sects (*Okuri-jo*) which were held by Shimizu Sukegoro who was the village *shoya* at that time. The first half of the 18th century was the eve of the rise of the silkworm egg industry, which would become the core industry of Kami-shiojiri village. The marriage zone in the village at that time was directly linked to the development of markets and the movement of labour. Although the marriage count includes divorce, about 40% of the Ueda marriages took place in the Shiojiri group which includes Shiojiri village, Akiwa village and the neighbouring villages. It seems that the area is narrower than in the latter half of the 18th century but the distribution is the same. The marriage locations are different but relatively close. This is the eve of the formation of the marriage zone.

はじめに¹⁾

本稿は、18世紀前半の旧上田藩上塩尻村における通婚圏の形成について、当時の同村庄屋

であった清水助五郎家文書である宗旨送り状を中心に解明を試みる。上塩尻村研究は以下に述べるように、新史料の発見があるたびに、その対象時期を18世紀末から18世紀初めまで順次遡ってきている。長野県上田市上塩尻に在住の山崎忠男氏が「上塩尻の今昔」57号（2018年）に掲載した記事は、18世紀前半をカバーする上塩尻村の通婚圏について伝えている。その内容は、清水助五郎家に残存している史料「縁女（男）送り状」「縁女（男）送り状返信」177件の分析結果である²⁾。享保16（1731）年から明和3（1766）年にかけて35年間、清水家が庄

* 愛媛大学法文学部教授

- 1) 本稿の起草にあたっては、2020年5月からオンライン形式をとるようになり定例化した上塩尻村研究会（モノグラフ第2巻公刊原稿検討会）に常時参加する、佐藤康行名誉教授（新潟大学フェロー）による示唆が直接の契機となった。モノグラフ第2巻または二巻本の内容にはほとんど寄与しえなかったものの、今後の展開に役立つかも、とさらなる追加分析を長谷部弘教授にお勧めいただいた。両氏には謝意を表するとともに、本稿をもって長谷部教授の退官記念にする。なお、本稿は、学術振興会科研費基盤（B）一般「市場経済形成期における地域金融組織の日英対比研究」（H30～R2）の研究成果公開の一部をなす。

- 2) 旧上田藩清水助五郎家文書26-1～18。この内、26-1「縁女等返書 上塩尻庄屋宛」状70件および26-2「縁女等送状」状69件の一紙文書が主たる情報源である。なお、清水助五郎は上塩尻村にあって享保16（1731）年から明和3（1766）年まで庄屋に在任していた。

屋に就いていた時期の通婚に関するデータとなる。庄屋が他村の庄屋に縁女（男）送り状を送り、それに対する先方の庄屋からの返信があるものとされていたからである。その期間のすべてが集計され、送り先の村名と村ごとの件数が記載されている。同村内の縁組は記載されておらず、集計はない。

山崎氏の分析は、2012年2月、清水助五郎家文書の発見について、一族である同村在住で上塩尻今昔の会メンバーでもある清水久之助氏の報により、筆者と岩間剛城氏（近畿大学経済学部准教授）とが急行し写真撮影をするところから始まっている。山崎氏が上塩尻今昔の会理事長として、また清水氏の要請もあってわれわれの写真撮影に立ち合い、その後ご自宅に文書を移動し、文書整理および目録作りをされたからである。上記分析はそのときになされた。2012年2月という、後述するように、同年7月に上田市博物館に寄贈されていた馬場弥平次家文書の整理がなされ、目録がようやくできあがったばかりの頃となる。そのとき偶然研究会のメンバーで史料調査をしていた際に、従来天明3（1783）年が最古の残存と思われていた上塩尻村宗門改帳の年代が宝暦7（1757）年まで遡ることとなった。もっとも、このとき見つかった宝暦7（1757）年から明和4（1767）年までの11年間で7年分の新たなデータについては、その分析および既存の天明年間以降の宗門改帳データおよび上塩尻村各家系図データとの接合が決着するのは2015年までかかっている。

他方、やはり筆者が新たに科研費研究として上塩尻村における無尽・講の研究に、金融史の専門家である岩間氏の協力を得て本格的に取り組み始めた2018年6月、清水久之助氏からのご教示で、藤本蚕業歴史館所蔵の伊勢暦の書き込みについて知らされ、18世紀前半の記録を見出した³⁾。もっとも、それは佐藤総本家であ

る善右衛門の私記であるにとどまる。したがって、同時期に庄屋であった清水助五郎文書における送り状等の情報とも照合はなされていない。実際に、今回あらためて通覧しても、伊勢暦書き込みからの情報とはほぼ交錯しない。しかし、少なくとも上記通婚圏の分析が、享保16（1731）年から明和3（1766）年にかけて35年間、清水助五郎が庄屋に就いていた時期の通婚に関するものであり、上塩尻村から他村への嫁入り・養子縁組の受け入れ先庄屋への一札文書および他村から上塩尻村庄屋宛の宗旨送り状の貴重なコレクションであることは確かである。離縁をも含めてのカウントであるものの、総計177件のうち隣村の下塩尻村31件、秋和21件を含む旧塩尻組で72件、と4割強になる。他に鼠宿に10件、坂城に11件というのが目立つ。次に見るように既に宗門改帳からのデータがある18世紀後半の分布よりもさらに範囲が狭い感じはあるが、散開度は同様である。

他方、その数値が出されている前後の期間、本研究会の上塩尻村縁組についての情報は天明年間の1780年代から宝暦年間の1750年代、そして今回の1730年代までと順を追って遡っている。

あらかじめ述べておくと、本稿でいう上塩尻同族（マケ）とは、通常八家といわれる佐藤・山崎・清水・馬場・原・春原（すのはら）・滝澤・塚田にくわえ、より小規模なマケとして北澤・高遠・小祝・菅沼・臼澤・小宮山・高見澤・坂田（沓掛）・岩崎・別系統山崎などがある。そのうち、佐藤は自他共に認める最古の家柄として、総本家を絶やさずに多くの分家・孫分家を出し、1830年代までに村内最大の蚕種家的発展をとげる。それに次ぐ、山崎・清水・馬場は蚕種業が始動する18世紀の初めまでに、いずれも総本家が途絶え、支流が本家となり蚕種家

3) 拙稿「資料：旧上田藩上塩尻村伊勢暦書き込み・1」『国際比較研究』15, 2019年, 「同・2」

『国際比較研究』16, 2020年。また、拙著『村の相伝〔日英対比研究編〕—社会的DNAの検出—』刀水書房, 2021年, 第3章。

としての成長をすることで同族を束ねようとするのは18世紀末から19世紀前半にかけてである。これら4家で村内人口の半分を占める。8家のうち、残る原家は小規模ながらまとまりがあり庄屋も出すために、庄屋文書が残る。他方、春原家は千曲川大河原の新開地（あらや）に集落を作り、人数的には村内人口の6分の1を占めるものの、そもそも総本家がなく、マケとしての一体感は感じられない。滝澤・塚田は、中興の祖塚田茂平次が姓を保ったまま滝澤家の養子に入り、その後の両家の家系は混然としている。総じて18世紀末から19世紀初期に分家の独立が盛んとなり、家連合としての同族団が一般化する。

1 前 提

上塩尻村における縁組の状況を知るための主要史料としては、データベース化した家系譜群および宗門改帳がある。

〈家系譜データ〉：佐藤八郎右衛門忠恕編になる旧上田藩上塩尻村各家系図（「諸家代継」）の記載をたどり、最古である天文7（1538）年佐藤総本家善右衛門初代没年の記載以降、宗門改帳残存開始以前天明2（1782）年の時期までを中心に縁組を251件。

〈宗門改帳データ〉：天明3年（1783）年以降慶応4（1868）年までの上塩尻村宗門改帳の付箋を通して得られる縁組を1,076件。宗門改帳は、上塩尻村においては寺壇関係と親族関係についての記録である⁴⁾。村寺（東福寺・真言宗）の他、近隣村に位置する檀那寺（耕運寺・曹洞

宗等）各々に旦那の「家」数および男女人数・人口総数が帳面末尾で集約される。そして、ひとまとまりの単位ごとに筆頭主以下名前・年齢および筆頭主との続柄が記されている。

宗門改帳作成の本来の趣旨は、村内居民すべての寺壇関係の掌握にとどまらず、実際に田畑を所持し家業に勤しむ本百姓およびそれに準ずる「家」を把握するものであった。それゆえ、「旦那」の「家」数は天明3年で75軒、のちに70軒の時期をへて76軒になり以後その数は変化しないまま幕末をむかえる一方で、実際の帳面上で筆頭者を抱く単位の総数は、天明3年の90余単位から次第に増加をみせ、幕末期の160余単位までにいたるのである。その増えた単位とは、18世紀初頭の「家々」が相続・分家・絶家などの継承・消失による過程を経て生成したなんらかの親族集団であった。

縁組データで、家系図データから得られる知見は以下になる⁵⁾。

佐藤八郎右衛門忠恕編になる旧上田藩上塩尻村各家系図の記載をたどり、最古の天文7（1538）年佐藤総本家善右衛門初代没年の記載にはじまるデータは上記のように251件得ている。宗門改帳残存開始以前の状態を探るにはこれらのデータを用いるしかない。佐藤家を中心視座とした家系図編纂であるため、佐藤家情報をもっとも充実しており、件数も251件中72件、と全体の3割を占める。主要マケ（同族）では、山崎家26件、清水家29件であるが、意外に馬場家が62件と多い。

村内での縁組みは、251件中88件で全体の3分の1程度になる。佐藤総本家や筆頭分家を除

4) 上塩尻村宗門改帳については上田市博物館 上塩尻佐藤嘉三郎家文書 1/719-747、宗門御改帳（文政13年-万延元年）、同馬場直次郎家文書（天明期および文政6年）。上田市上塩尻原奥家文書9（天明6）、13（天明7）、14（天明8）、17（寛政12）、19（享和2）、27-35（文化7-文政3）、36（文政5）、39（元治2）。45（慶應4）。

5) 拙稿「近世上田藩上塩尻村における家系図の『家族』と宗門改帳の『家族』—系譜関係・親族関係・世代継承—」、『村落社会研究（ジャーナル）』19号、2003年、3頁；長谷部弘「近世村落社会の共同性—上田藩上塩尻村五人組組織の事例研究—」、『村落社会研究（ジャーナル）』18号、2003年、10頁。

き、18世紀中葉から末にかけては各マケ全体が新たに「家」を確立するときであり、意外に村内にこだわらず、また村内でも総本家や筆頭分家以外であれば、割合拘束なく縁組がなされていたように思われる。傾向としては、佐藤家と馬場家との縁組は目立つ。これは馬場家の事例が多いことと表裏をなす。が、総じて村内の縁組は分家同士、また貫高も大差ない、というものが多い。

更にその村内縁組 88 件中で、同族・マケ内の縁組は 26 件である。この 26 件すなわち全体の 1 割という数字は予想外に少ない。この少なさは、上塩尻での分家創成の過程がときに数世代を要することから、名跡をつぐための養子分家など明白なもの以外は「異動」としてその時期が表れないことに起因する。その背後には、そもそも男子の移動についての記載がきわめて少ないという状況がある。

そして、村外との縁組は、平均距離でいうと転入は 3.6 キロメートル、転出が 3.9 キロメートルであり、地図に分布を表すと出入りともに半径 4 キロメートルの同心円内に収まる⁶⁾。それより遠隔かつ他領にまたがる縁組は、格式をもとめて縁組をする佐藤総本家（善右衛門家）・分家筆頭（八郎右衛門家）や貫高が高い他家本家や裕福な家に限定される。

さらに、宗門改帳データが得られる時代にな

り、天明 3 年（1783）年以降慶応 4（1868）年までの上塩尻村宗門改帳の付箋を通して得られる縁組みは、1,076 件である。

宗門改帳での村内縁組は対象時期を通じて 158 件で全体の 15% ほどである。基本的に、上塩尻村内の縁組は積極的なされていたようには見えない。むしろ、外部に縁を求める場合が多かったのか、あるいは市場機会とともに縁談の機会も広がったのではないか。とくに、同族内でとなると 69 件である。村内縁組中、春原家と諸小マケが 65 件、と主要マケ以外のマケで全体の 4 割を占めているのは注目に値する。春原家の場合には、マケ名を同じくするも同族意識が弱く、同族内でも縁組を結びやすかったと思われる。村入りは 511 件、村出は 408 件、村内 158 件となる。村外との縁組においては記録が完備しておらず即断しがたいが、5 対 4 で入超である。上塩尻村総人口は、停滞を特徴とするが、それでも天保年間までは微増している。その微増も出生と言うよりは、この入超に原因が求められる。それは、凶作の中にあっても生業としての蚕種業を続けたこの村が外部から求めた女性労働力であった。別稿でみたように⁷⁾、人口が一時増加する天保期には女性の比率が男性を凌駕するのは、蚕種業に従事する女性労働力需要が増えたことと関連すると考えられる。だが、凶作進行中の時期には別稿で述べたように出生数が下がる。全般的に栄養状態が劣化し、疾病疫病も蔓延する中で労働強化がなされ、女性に大きな負荷がかかったことを示唆するものである。

天明期以降の縁組は、北国街道に沿って伸びていくが、転入は平均 6.3 キロメートル、転出

6) 本平均距離の分析にあたっては、山形大学大学院教育実践科村山良之教授の支援を得た。ここに謝意を表するものである。距離の計測方法は、各村の中心集落の中心部に設置したポイントと上塩尻（大村中心部に設置）ポイントとの直線距離を ArcGIS を用いて UTM54 帯上で計測した。平均距離の求め方はのべ移動距離（村々直線距離×人数）/のべ移動人数である。なお、この数字は、上塩尻村内の移動を除外したものである。上塩尻村内の移動（この場合、対象時期の各家屋の所在は不明な点が多く、距離は 0 とする）を含めた場合、転入は 1.7 キロメートル、転出は 1.6 キロメートルとなる。

7) 前掲拙稿「上塩尻村の人口動態」180-3 頁とくに図 4-4 および図 4-5；拙稿 17-9 頁「飢饉時の人口変動と家族・親族関係」、長谷部弘・高橋基泰・山内太編著『飢饉・市場経済・村落社会—天保の凶作からみた上塩尻村—』刀水書房、2010 年、第 2 章、17-9 頁。

が5.5キロメートルで、基本的には最大半径6キロメートルの同心円内に収まる⁸⁾。同心円外で遠隔の他領・他国にまたがる縁組は、依然として、家格をもとめて縁組をする佐藤総本家・分家筆頭や貫高が高い他家本家や裕福な家に限定される。村入りでは、もともとは上塩尻村から出て離縁により村に戻った事例54件を含む。また村出では109件が離縁により村から転出した⁹⁾。なお、男女別でいえば、村入りは女性420件・男性91件、村出は女性331件・男性77件であり、女性は男性に対して4倍ないし5倍になる。これは、男性の養子などの縁組が総体的に少ないことの反映である。

以上が、2012年までに本研究会が上塩尻村の通婚圏について知り得た内容である。

2 宝暦・明和期上塩尻村宗門改帳概観

2012年7月2日長野県上田市博物館2階資料室において、上塩尻村研究会は、偶然、整理中の古文書群の中に宝暦・明和期の上塩尻村宗門改帳（「宗門御改帳」）11年間分を見出した。それまでの最古のものは天明3（1783）年の宗門改帳であり、その「発見」により、宝暦7（1757）・宝暦9（1759）・宝暦11（1761）・宝暦13（1763）・宝暦14（1764）・明和3（1766）・明和4（1767）の各年の宗門改帳が得られたのである。飛び飛びであり、さらにその後の宗門改帳が、上述の天明3年、1783年なので、16年間のギャップがある。

正徳年間五人組帳時代の宗門改帳とは形式の違いがある。その直後の宝永年間の宗門帳（秋

和村中島治男家蔵・宝永年間の断片）とは異なるからである。また、各単位の記載の順番などは、記載者が変わるからか、時折変化も見られる。

しかしながら、このとき新たに見出した宗門改帳データを、既成の宗門改帳データと個人単位の行列として接続した。とくに明和8（1771）年人別帳データが、佐藤八郎右衛門家文書「文禄ヨリノ代継名前帳」に収録されており、それを中継として結節した。それにより、各個人の特定と、属する同族（マケ）および家系が判明した。マケおよび家系が分明となったことで、これまで天明年間、あるいはせいぜい明和8年までの遡行のみであった個人・家系・マケの動勢が一望できるようになった。他方、上記「文禄ヨリノ代継名前帳」記載にしたがって各時代の記録を16世紀末の文禄年間からやはり個別にたどることもできるようになったのである。

「代継名前帳」は、佐藤八郎右衛門家で数代重ねて上塩尻村の各マケの家系譜を作成するための基礎データとして長い時間をかけて作成されたものである。それを最終的にまとめたのが八郎右衛門第11代、忠恕である。したがって、この帳面をたどれば、同時代人がどのように家系譜を作成したか、少なくともどのような記録を用いたのかわかる。もちろん、編纂者もしくは村民の記録に由来する情報もあり、聞き語りによるものもある。したがって、誤解・異聞も含まれるが、多方面から照会して作成したことは確かである。

すでに上塩尻村総合モノグラフ研究第2巻第5章で村山良之教授によりデータ分析は進んでいるところであるが、その基となったデータがどのように生成されたかを含めて、いわば素のままで示すことにしたい。本稿の試みとしてはそれで十分に役立つからである。そのため以下は、2012年に見出された宗門改帳が示す人口動態データを概観し、次いでマケ毎の動勢、そして、相続・分家の局面を含む各単位の代替わ

8) ここでも上塩尻村内の移動を除外した。上塩尻村内の移動を含めた場合、転入は4.5キロメートル、転出は3.7キロメートルとなる。

9) 当時の現地における俚諺「上塩尻に嫁にいくというのは茨の木を背負うようなものだ…」とは、その労働力の負荷の大きさを示している。

りをたどったものである。

これまでのデータが語るところを振り返ると、天明期に上塩尻村の人口は 800 名を超し、その後寛政期・享和期に 800 名を割るにせよ、天保の大凶作期が終わった直後の天保 11 (1840) 年が 784 名で最低値を記録する。しかし、裏を返すと最も厳しいときでも 800 名前後は維持する。そして、この天保の大凶作期は極めて過酷な状況の中、蚕種業に集中特化して現金収入を果たし、栄養失調か疫病か原因は特定できないが、餓死者ではないにせよ村内から通常年よりも多くの死亡者がでるのは避けられなかったが、村全体としては比較的短期間に再興ができる程度には、かろうじてやり過ごしたことが諸記録からうかがえる。

そして天明期はそれ自体大凶作期であったが、人口が天明 3 (1783) 年の 814 名から天明 5 (1785) 年の 804 名、そして天明 8 (1788) 年の 783 名、その後 10 年たって寛政 10 (1798) 年に 802 名にまで回復する。したがって、上塩尻村の人口は 2 つの大凶作一飢饉時であっても、780 名未満になることはなかった。ところが、天明期から四半世紀前の宝暦年間は、そもそも人口が概ね 100 名少ないのである。とくに、女性人口が少ない。真っ先に考えられるのが女児に特化した何らかの産児制限である。だが、そのことを直接示す記載のある史料は見つからない。他方、宝暦 7 (1857) 年の宗門改帳の 11 歳以下の男女別人数を数えると

年齢	1757 女子	1757 男子
2	10	9
3	4	7
4	7	7
5	4	8
6	4	3
7	4	11
8	3	9
9	4	2

10	1	5
11	9	6

確かに、傾向として女子が少ないが、宝暦以降は女子の数は増加を示す。特にここで着目すべきは、この年から 10 年前、ちょうど寛保期にあたるが、そのときに生まれた女子ならびに男子の少なさである。いわゆる「戊 (いぬ) の満水」で元宿を中心に千曲川の氾濫により本村は隣の下塩尻とともに大きな打撃を受けた。この事件が実際の人口数、もしくは記載される人口数に影響をもたらした可能性も考えている。そして寛保年間の大洪水の前後は、記録には十分残っていないが、深刻な不作が続いたものと考えている。

本村住民は、長年の不作と突発的な洪水被害、これらの危機的状況を打開する必要があった。そこで決して急速な進捗ではないが着実に、馬場家を中心とした元宿再構築という村内開拓がこの時期進んでいる。

他方、これも現在検討が進んでいるが、蚕種商人の登録の記録が示すように、宝暦期に蚕種経営により、上塩尻住民に経済的余剰が与えられたことで、その人口増加につながる要因ができたものと見なす。とくに本質的に家内産業である蚕種業は 24 時間態勢で管理の必要な蚕種を扱うため、特に女性労働力を要求する。労働負担は大きいし、食物も米は食べられなくとも麦の団子汁は供給可能になり、少なくとも、「食っていける」ようになってきたのである。しかし、まだまだその産業基礎は不安定であり、それに対応する産業基盤組織としての本家一分家関係も各同族においてこの時期に成立し、われわれに史料と残されている、上塩尻諸家代継という家系譜に記される家系はほとんどこのときから実質性を帯びるのである。それ以前はいふなれば神話時代であり、佐藤家をのぞく他の家々の総本家の衰退もどれもが経緯が明確でない。

以上が、今回の清水助五郎家文書の分析に取りかかるまでの状況である。

3 清水助五郎家文書の分析：宗旨送り状を中心に

かくして筆者は、2020年7月山崎氏を訪問した。その際うかがったのは、2012年に清水助五郎家文書の発見にともない、氏が目録を作成しながら送り状など177件を分析し、村外の通婚圏を地理的分布でされたことを確認したが、8年前のことで、どれをどのようにされたか、完全には覚えていないとお話であった。したがって、今回あらためて筆者は清水助五郎文書のうち、該当すると思われる史料を163件までまとめ、分析をした。この時点で山崎氏の数字と14件の差があり、さらに、地理的分布も大枠は間違いないのだが、細かに違う。その理由の1つには最終記載元が宗門改帳のため、とくに享保年間あたりの早期のものは檀那寺の方が居住地よりも優先して書かれており、寺の所在は明確だが、居住地はそうとは限らない、という事情も作用したと推測する。

今回の分析結果として、清水助五郎家文書・通婚圏で、出入りと宗門改帳との照合結果を判定の根拠と共に一覧にした。

上塩尻から出ていったのが83件（うち離縁12件・養子出5件）、入ってきたのが78件（うち離縁8件・養子入り3件）である。また1件は上塩尻内であるが、檀那寺の変更によるものとなる。

それぞれに背景があり、本稿でそれを探る。ただし、あらかじめ述べておくと、宗門改帳の残存が始まる宝暦年間以前、1740年代以前のものとなるとなかなか捕捉はむずかしく、かろうじて名前のパターンからマケ名が推測できるくらいにとどまるものもある。その中で山崎・春原・滝澤・高遠・小祝など、当該時期の様子がとらえにくいマケでも縁組みによる出入りが

件数として目立つ。少なくとも正保五人組帳から宝暦年間までの比較的まとまった移動に関するデータなので、一定のパターンは得られるのではないかと期するところがあり、以下個別分析をおこなう。なお、年代の特定については、干支だけで書かれたものが多く、その都度の処理が必要となる。

文書としては

（実例）

参照番号 1

送状之事

一 当村孫八娘 かつ 年二十八 其御村

源右衛門殿妻ニ内縁仕候

右孫八宗旨御料横尾村耕雲寺

旦那ニ御座候得共右御引取候而者源右衛門殿

宗門ニ可被成候則此方帳面相除キ申候間

其許御帳面ニ御載セ可被成候仍

送状如件

御料金井村

名主 武兵衛[㊤]

宝暦十二年午二月

上田御領上塩尻村

御名主 助五郎殿

まず文書名がいくつかのパターンに分けられる。覚（おぼえ）が62件で最も多い。次いで、何もないのが41件。さらに一札之事または送り状（之事）あるいはその混交型が28件。くわえて、これも定型と言えるが、「乍恐奉願口上書之御事」または「奉願上口上書之御事」などが21件である。

もっとも、これらの文言に流行などがあったのかどうかは、見定めがたい。その理由の1つとして、先に触れたように、年代が特定できる事例が163件中36件と2割程度だからである。なお、その2割の年代が特定できる事例は、最古が享保17（1732）年であり、1730年代は5件のみ。次にわかるのが元文6（1741）年で13件が1740年代となる。そして7件が1750年代、10件が1760年代である。その中では文書名はランダムに、しかしもれなく登場するため、と

表 1 18 世紀前半上塩尻村における通婚圏

	山崎氏算定	上塩尻から出	上塩尻に入		山崎氏算定	上塩尻から出	上塩尻に入
塩尻組				中吉田			
下塩尻	31	9	16	林之郷	1		1
秋和	21	12	7	埴科郡			
諏訪部	2		1	鼠宿	10	3	4
新町	2		1	新地	5	1	2
西脇	2	1		金井	6	3	1
鎌原	1			横尾	5	1	
生塚	2	1	1	中之条	6	1	4
房山	3		1	坂城	11	2	10
山口	3	1	1	下戸倉	1		1
常田	5	3	3	松代	1		
上田町				鋳物師屋	2		1
紺屋町	2			更級郡			
鍛冶町	3		2	網掛	1	1	
海野町	1		1	石川	1		1
原町	1	1		田野口	1		
上田城内	2	1	1	塩崎	1	1	
小泉組				丸子			
諏訪形村	2	1		飯沼	1		
中之条	4		4	長瀬	4	1	1
下之条	3	1		和田村	3	1	1
御所	1		1	下郷(殿城仙石領)	1		2
浦野組				平尾(佐久郡)	1		1
福田	1	1		大笹(上州吾妻郡)	1		
馬越	1	1		177			
塩田組				(山崎氏算定外)			
中野	2			舞田		1	
西前山	1			奈良尾		1	
手塚	3	1	1	岡		1	
別所	1			岩井田領鍛冶村		1	
洗馬組				和田宿		1	
軽井沢	2	1	1	城戸		1	
大日向	1	1		坂木立町		1	
国分寺組				江戸		6	
伊勢山	2	1		田町			1
金剛寺	1	1		本郷			1
岩門	1	1					
長島	1			小計		71	62
大久保	3	3	2	不明その他		12	16
堀	1	1				83	78
田中組				上塩尻内		1 ^{*1}	
田中	1		1				

くにはやり廃りというのではなく、定型文としてあったと見なしうる。

上記のように干支だけで記されている場合、宗門改帳の記録との照合が可能な事例とそうで

ない事例がある。さらには照合可能と言っても異なる人格で同名もあるので、確定とはしがたい。くわえて、この一覧には離縁が8件含まれている。

表 2 上塩尻村清水助五郎家文書送り状に見る通婚

文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元主名	出自	名前	年齢	出自宗首	送り出し場所	送り出し名主	送り出し先	送り出し先宗首	上塩尻対象者	マケ	家系図考察
1 送状之事 宝暦12年 壬子2月	1762	金井村	武兵衛	孫八娘	かつ	28	御料横尾村榊雲寺	上塩尻村	助五郎	渡	源右衛門	嫁入	源右衛門 清水	家系図に登場せず	家系図に登場せず
2 麦正月14日		坂木横町	年寄 定四郎	彦三郎妹	はな	25	榊宗満泉寺	上塩尻村	助五郎	半六妻	真言宗東福寺	嫁入	半六 清水	宗門改帳に天明3年 参照番号53 までこの名前では登場せず。清水番外(仁左衛門系) 2・1 従弟55歳；女房 従弟妻49歳	宗門改帳に天明3年 参照番号53 までこの名前では登場せず。清水番外(仁左衛門系) 2・1 従弟55歳；女房 従弟妻49歳
3 寛子 2月		上塩尻村	助五郎	政右衛門妹			真言宗東福寺	秋和村	秋和村	十兵衛作清次郎兼二内門縁	七右衛門七右衛門内郎能左衛門	嫁出	政右衛門 滝澤	天明3 (1783) 年参照番号69；筆頭者58歳	天明3 (1783) 年参照番号69；筆頭者58歳
4 寛麦正月11日		秋和村	徳左衛門①	七右衛門・東兵衛姫(女子から後に訂正状)			諏訪形村宗宗金窓寺	上塩尻村	助五郎	基右衛門殿甥初之助妻	助五郎	離縁			
5 寛亥正月8日		御所村	吉兵衛	次郎七妹	さよ	25	真言宗祥雲寺	上塩尻村	助五郎	武助殿妻	真言宗東福寺	嫁入	助八 菅沼	家系図に登場せず。ユニット自体は天明3 (1783) 年参照番号76、しかしその弟としての武助の名前は宗門改帳に見出せず。弟と思われるのは五郎八・弟・47歳(宝暦7年)	家系図に登場せず。ユニット自体は天明3 (1783) 年参照番号76、しかしその弟としての武助の名前は宗門改帳に見出せず。弟と思われるのは五郎八・弟・47歳(宝暦7年)
6 寛卯正月10日		上塩尻村	源藏	清右衛門殿作桑助殿妻			諏訪部村宗宗芳泉寺	上塩尻村	助五郎	当村吉衛門四郎兼半妻	当村吉衛門四郎兼半妻	嫁入	村内 内兵衛 入、出	家系図に登場せず。ユニット自体は天明3 (1783) 年参照番号87、しかしその弟弟としてののおひさの名前は宗門改帳に見出せず。	家系図に登場せず。ユニット自体は天明3 (1783) 年参照番号87、しかしその弟弟としてののおひさの名前は宗門改帳に見出せず。
7 送り送書子正月13日		上塩尻村	助五郎	清右衛門殿作桑助殿妻			諏訪部村宗宗芳泉寺	上塩尻村	助五郎	七右衛門①徳左衛門	彦兵衛方	離縁	桑助(娘 助)	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
8 寛未正月13日		上塩尻村	助五郎	清右衛門殿作桑助殿妻			諏訪部村宗宗芳泉寺	上塩尻村	助五郎	七右衛門①徳左衛門	彦兵衛方	嫁入	助八 菅沼	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
9 寛巳正月11日		上塩尻村	助五郎	清右衛門殿作桑助殿妻			諏訪部村宗宗芳泉寺	上塩尻村	助五郎	七右衛門①徳左衛門	彦兵衛方	嫁入	助八 菅沼	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
10 送り送書未正月17日		上塩尻村	助五郎	清右衛門殿作桑助殿妻			諏訪部村宗宗芳泉寺	上塩尻村	助五郎	七右衛門①徳左衛門	彦兵衛方	嫁入	助八 菅沼	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
11 口上之事巳12月27日		上塩尻村	助五郎	清右衛門殿作桑助殿妻			諏訪部村宗宗芳泉寺	上塩尻村	助五郎	七右衛門①徳左衛門	彦兵衛方	嫁入	助八 菅沼	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
12 寛西4月		本郷村	彦兵衛①	久蔵妹	へん	25	真言宗西福寺	上塩尻村	助五郎	彦兵衛①	彦兵衛方	嫁入	幸八 春原？	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
13 正月11日		上塩尻村	助五郎	文助殿抱女式人			上塩尻村	助五郎	助五郎	彦兵衛①	彦兵衛方	嫁入	幸八 春原？	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
14 一札之事寛保貳年戌二月	1762	上塩尻村	助五郎	文助殿抱女式人			上塩尻村	助五郎	助五郎	彦兵衛①	彦兵衛方	嫁入	幸八 春原？	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
15 乍恐以口上書年寄定四郎	寛保貳年戌二月	坂木横町	年寄定四郎	彦三郎妹			坂木村榊宗満泉寺	上塩尻村	助五郎	彦兵衛①	彦兵衛方	嫁入	幸八 春原？	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
16 乍恐以口上書を御注進申上候御事	寛保貳年戌二月	上塩尻村	助五郎	彦三郎妹			坂木村榊宗満泉寺	上塩尻村	助五郎	彦兵衛①	彦兵衛方	嫁入	幸八 春原？	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
17 乍恐以口上書を御注進申上候御事	寛保貳年戌二月	坂木村	年寄定四郎	彦三郎妹			坂木村榊宗満泉寺	上塩尻村	助五郎	彦兵衛①	彦兵衛方	嫁入	幸八 春原？	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人
18 乍恐以口上書を御注進申上候御事	寛保貳年戌二月	御料坂木新町	安兵衛	市之丞娘			坂木村榊宗満泉寺	上塩尻村	助五郎	彦兵衛①	彦兵衛方	嫁入	幸八 春原？	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人	家系図1・13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後続くので、ここは別人

表 2 つづき

文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元名主	出自	名前	年齢	出自・宗旨	送り出し場所	送り出し先名主	送り出し先	送り出し先宗旨	上場見対象者	マケ	家系図考察
19 覚	寛延四年未ノ正月十一日	1751	上塩尻村	助五郎	金次郎妹	そめ	22	神宗二面新地・耕雲寺	松代新鳳宿村	五右衛門⑤	藤五郎頼二内縁	嫁出	金次郎	滝澤	宗門改帳に天明3年参照番号52までこの人物は登場せず。もっとも、天明3年時点で重頼が金平65歳の使男として60歳。妹も見当たらず。
20 覚	巳正月四日		鍛冶町	年寄・八右衛門⑤	助七後家娘	すめ	22	神宗元海野興善寺	上塩尻村	助五郎	武内殿妻	嫁入	武八	佐藤	家系図系図53・重左衛門は宝暦7(1757)年時点で重頼者松治郎27歳で、宝暦7(1757)年・寛政5(1793)年・寛政6(1794)年・寛政7(1795)年・寛政8(1796)年・寛政9(1797)年に佐藤武八・貴高63歳で登場。
21 覚	辰正月9日		下塩尻村	庄屋・源藏⑤	梅兵衛女	よめ	18	東福寺	上塩尻村	助五郎	通兵衛殿・伴源太郎妻	嫁入	源太郎・滝兵衛	高見・澤(高遠)	宝暦7(1757)年時点で、高見澤通兵衛の名義だけ貴高0003貫で残るが、その息子である万太郎は見受けられない。もっとも、天明3年の宗門改帳で高見澤家系図1・2で滝兵衛55歳が登場する。なお、天明3年には女房はなし。
22 口上	戊正月11日		眞宿村	庄屋・郎右衛門⑤	八右衛門女子	いらい	21	神宗耕雲寺	上塩尻村	助五郎	久四郎殿妻	嫁入	久四郎	春原	家系図系図2・3・女房は13歳下で宝暦7(1757)年時点で36歳。
23 返状之事	宝暦11年巳ノ正月12日	1761	上塩尻村	助五郎	半弥殿娘				中之条村	吉左衛門⑤	頼尾村・耕雲寺	嫁出	半弥	佐藤	家系図系図3ににあたる。宝暦7(1757)年時点で73歳。ただし、娘が登場しない。
24 覚	辰3月		上塩尻村	助五郎	次郎八殿				諏方形村	庄屋・平次郎⑤	兄六兵衛・万江和因	離縁返し	次郎八	馬場?	宝暦7(1757)年治部入35歳。重頼者の男としてあり。明和4年(1767)年45歳。重頼孝忠兵衛70歳の男子として、宗門帳に登場するが、その後天明3年宗門帳では消失。万屋下の弟孝之助が忠兵衛(1764)年・35歳の同年28歳の女房を娶えている。天明3年、孝之助は忠兵衛
25	巳正月		林和村	庄屋・仁右衛門⑤	喜右衛門女子	はつ	18	諏訪郡村・徳土宗二面・芳泉寺	上塩尻村	助五郎	殿員子・八三郎妻	嫁入	五左衛門	春原	宝暦7(1757)年三郎23歳男としてあるのが、寛政10(1798)年63歳従弟までに春原五左衛門として筋目を離いだ形となっている。
26 一札之事	宝暦6年子正月	1756	坂木御料・同村	与四郎⑤	□郎娘	みね	22	坂木村・耕雲・満泉寺	上塩尻村	助五郎	銀七作三之助妻	嫁入	三之助	山崎	家系図系図6-1
27 一札之事	延享五年辰正月	1748	上塩尻村		善八家内四人			山口村・海神寺・無住三付担寺・代担	御料坂木村	満泉寺		引越し	不明		
28	酉12月		下塩尻村	庄屋・源藏⑤	梅兵衛女	とめ	21	東福寺・旦那	上塩尻村	助五郎	通兵衛殿・伴・三郎妻	21と同様?	源太郎・滝兵衛	高見・澤(高遠)	宝暦7(1757)年時点で、高見澤通兵衛の名義だけ貴高0003貫で残るが、その息子である万太郎は見受けられない。もっとも、天明3年の宗門改帳で高見澤家系図1・2で滝兵衛55歳が登場する。なお、天明3年には女房はなし。
29	辰正月14日		上塩尻村	助五郎	精六殿従弟				常田村	庄屋・源兵衛	仁兵衛・伴十殿妻	嫁出	町月窓寺		塚田茂平治は権六2代目であり、この時点では権六で通っていたか。
30 縁組返書	寅正月		松城新新地村	庄屋・新右衛門⑤	庄次郎女	すじ	19	神宗耕雲寺	上塩尻村	助五郎	文四郎殿娘	嫁入り	文四郎(長五郎)	高遠	高遠家系図味五兵衛・13・宝暦7(1757)年・長五郎28歳男子として付箋でこの通りの嫁入りが果たされる。もっとも、宝暦9年までに離縁したと考えられる。
31 覚	明和二年酉ノ正月	1765	上塩尻村	助五郎	六兵衛殿娘	せん	21		松代新鳳宿村	銀右衛門⑤	市郎兵衛・千之兵衛妻	嫁出	六兵衛	馬場	宝暦14(1764)年・明和3(1766)年時点で娘は登場せず。この六兵衛も家系図に登場しない。
32 返状一札之事	宝暦式年申正月日	1752	坂木料・耕雲・下倉村	十郎右衛門⑤	五左衛門娘	しを	19歳之十九	浄土宗・当村・宗安寺	上塩尻村	介五郎	太右衛門・と申之・万江縁付		太右衛門	馬場	宝暦7(1757)年馬場家系図2・2・半五郎44歳が重頼者であるユニットの伯父で家系図に現れない太右衛門70歳伯父にはその息子であったと思われるが家系図14・3・新右衛門後家の子である家系図14・3・八三郎4歳従弟とあった。この後家がここのしをと思われる。年齢が合う。
33 送り書之事	宝暦十四年申3月	1764	松代新新地村	新右衛門⑤	定右衛門	丈助28・女房21・いと3		神宗耕雲寺	上塩尻村	助五郎	喜平次殿・子	夫婦子舞・菓子入り	丈助・女房・いと	佐藤	宝暦14(1764)年の宗門改帳付箋に反映(付箋)「男 29 丈助」「年22 女房」「姪 3 いと」
34	正月16日		上塩尻村		治左衛門女子				松代新新地村?		清七弟・三四郎妻	嫁出	治左衛門	春原	宝暦7(1757)年・孫右衛門32歳男子は天明3(1783)年までには治左衛門58歳重頼者に。彼の姉妹および娘に該当する女子、宗門改帳には見られず。
35 覚	宝暦14年申正月15日	1764	上塩尻村	助五郎	与平次女	より	17	上田御領・諏訪郡村・浄土宗・集寺	坂木村	伝兵衛⑤	伊兵衛七・仲友吉妻	嫁出	より(う)	原	宝暦13(1783)年(付箋)「常正月御領坂木村猪兵衛世仲友吉妻に縁付罷り申候」
36 覚	申正月11日		上塩尻村	助五郎	茂兵衛従弟	さつ	20		下塩尻村	庄屋・半右衛門	孫右衛門・浄土宗・泉寺	嫁出	茂兵衛	塚田	「さつ」は宗門帳に現れない。この茂兵衛も家系図に現れず。明和3(1766)年77歳で(付箋)「法正月相果申候」

表 2 つづき

文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し場所	送り出し元名主	送り出し先	送り出し先宗旨	上塩尻対象者	マケ	家系図考察
37 覚	寅 正月 8 日		下塩尻村	庄屋 十兵衛 衛門	幸之丞従弟	はな	24	松嶋御新地村御宗 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	善太郎 妻	嫁入り	善太郎	山崎	宝暦 7 (1757) 年家系図 8-1 善太郎 53 歳期と女房 35 歳で登場
38	巳 正月		上塩尻村	助五郎	惣之丞殿 姪				秋わ村	庄屋 仁右衛門	市兵衛 妻	嫁出	惣之丞	依田	宝暦 7 (1757) 年家系図 2-1 で惣之丞は 48 歳であるが、姪および他の成員が確認できない。
39 覚	延享 2 年 正月 5 日	1745	上塩尻村	助五郎	平左衛門 殿弟	平三郎	23		坂本領横尾村	基四郎 衛門	五郎兵衛 妻	美子出し	平左衛門 佐藤 雲寺	佐藤	宝暦 7 (1757) 年以降で本人は家系図で確認できない。が男子要吉 4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。平三郎は 14 年間に美子出。
40 奉願殿口上書之御事	宝暦 6 年	1756	上塩尻村	助五郎 (組頭清之丞・利兵衛)	惣之丞娘	とり		諏訪部村 浄土宗芳泉寺	御家中御元・御父配		浅井 義助 殿妻	嫁出 (ご家中)	忠之丞	山崎	家系図 18-4 宝暦 7 (1757) 年 52 歳
41 引取休之御事	宝暦 四 戌 年 正月	1754	上塩尻村	助五郎	平左衛門 女子	ちよ		御料和田 宿	御料和田 宿	平左衛門 妻	平左衛門 妻	嫁出	平左衛門 (30 代 同姓)	佐藤	宝暦 7 (1757) 年以降で本人は家系図で確認できない。が男子要吉 4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。平三郎は 14 年間に美子出。
42 一礼之事	戊 正月 7 日		中之条村		彦弥殿娘				上塩尻村	十兵衛 五郎	与助 妻	嫁入	与助	小宮山	宝暦 11 (1763) 年の時点で三次郎 48 歳筆頭者で、亡き兄の後継が 38 歳で同じユニット上におり、さらに女子ゆきか 4 歳であった。そこに女房 40 歳が初めて現れ、また三次郎は名前を与助に改名している。
43 送り状			下塩尻村	庄屋 半右衛門 衛門	久兵衛 女子	よし	23	諏訪部村 浄土宗芳泉寺	上塩尻村	助五郎	仙右衛門 殿妻	嫁入	(不明)		
44	未ノ 正月 9 日		秋わ村	庄屋 惣右衛門 衛門	市兵衛 妻 二約東生 條由不縁			神宗長昌寺	上塩尻村	助五郎	七右衛門 殿妹	離縁戻し	七右衛門 依田		家系図 1-5 : 天明 3 (1783) 年参照番号 47 : 筆頭者 46 歳として登場するまで宗門帳に現れる。
45	辰 正月 14 日		すわべ村	庄屋 作左衛門 衛門	芳泉寺門 弟 義助 七之助 妻				上塩尻村	助五郎	宇兵衛 殿	離縁戻し	(不明)		
46 覚	未 正月 13 日		勇山村	庄屋 忠右衛門 衛門	孫右衛門 男子	太七		上青木村 神宗龍洞院	上塩尻村	助五郎	久次郎 殿 女子 義	嫁入	春原 ?		小尻家系図 6-1 で、宝暦 11 (1761) 年已に初めて女房 21 歳を有している。
47 縁組送状	巳 正月 10 日		下塩尻村	庄屋 半右衛門 衛門	藤七姫	さつ		諏訪部村 浄土宗芳泉寺	上塩尻村	助五郎	半次郎 妻	嫁入	半次郎	小祝	宝暦 11 年に篠田平右衛門は御願名義で筆頭者 5,799 貫持っており、村外的には傳説だったのではないが、そしてその貫高は美子である重五郎にいき、重五郎は西原金五郎になる。
48 覚	美 正月 9 日		下塩尻村	庄屋 半右衛門 衛門	惣兵衛 姫	はつ	14	松嶋御新地村御宗 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	仁蔵殿 殿	嫁入	傳藏	原 (篠田)	家系図には登場せず。それ以前はたとえず、天明 3 (1783) 年に山崎家系図 6-2 銀七の従弟として 60 歳で登場する。
49 覚	寛保 2 年 戌 正月	1742	上塩尻村	助五郎	宇兵衛 殿 娘	よめ	28		坂井村 井村	忠右衛門 衛門 妻	安之丞 弟 金右衛門 妻	嫁出	宇兵衛	山崎	家系図には登場せず。それ以前はたとえず、天明 3 (1783) 年に山崎家系図 6-2 銀七の従弟として 60 歳で登場する。
50 送り状	宝暦 十 戌 正月	1762	松代領鳳宿村	又右衛門 衛門	藤七妻			諏訪部村 浄土宗芳泉寺	上塩尻村	助五郎	金平 殿 娘	離縁戻し (利縁)	金平	滝澤	龍澤家系図 2-2 金平は初出が天明 3 (1783) 年であるが、その時点で 65 歳である。また貫高は 0.86 貫程度で以前から低い。
51 御報	申 正月 10 日		下塩尻村	庄屋 万右衛門 衛門	喜兵衛 子	よく	23	佛土宗二面満助寺	上塩尻村	助五郎	藤五郎 妻	嫁入	藤五郎	春原	家系図平右衛門 4 藤五郎は宝暦 7 (1757) 年に 50 歳筆頭者である。9 歳年下の女房は 41 歳で、後も変わらずにいくので、18 年前、1739 年の嫁入りか。
52 覚	寛保 2 年 戌 正月	1742	御料所坂木町		半治郎 家	か ね 29 歳、二つ子 9 歳		神宗満泉寺	上塩尻村	助五郎	善人子由仁方江藤 付	子連れ嫁入り	(不明)		
53 覚	酉 正月 14 日		上塩尻村	助五郎	善右衛門 姫	れん	18	松嶋御新地村御宗 耕雲寺		長兵衛	小右衛門 殿 娘	嫁出 [加平次娘送状之義致失念]	善右衛門 佐藤		
54 覚	午 正月		上塩尻村	助五郎	与左衛門 殿 抱	はつ		常田村	常田村	理右衛門 衛門	惣吉 惣三郎 妻	嫁入	与左衛門 原		
55 送り書	戌 正月 十三日		上塩尻村	助五郎	加助殿 子			林和村	林和村	庄屋 七右衛門 衛門	平七 妻	嫁入	嘉助	春原	惣之丞 2 (藩六) 2 で宝暦 9 (1759) 年に 48 歳で娘にちゆ 7 8 歳でいる。9 歳年下の 4 (1767) 年に 16 歳で、後はたとれないが。

表 2 つづき

文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元 名主	出自	名前	年齢	出自 宗旨	送り出し 場所	送り出し先 名主	送り出し先 寺	送り出し先 宗旨	上場 対象者	マケ	家系図考察
56	壬正月29 日		松城新石 川村	庄屋 源左 新門⑩	鑑多清之 系妹			「代々々々」 七宗二面 上田御領 地村神宗 用寺延綿 二御殿	上塩尻村	助五郎	龜多三八 卿又八妻 二縁組	嫁入り*	(手付け 寺)		家系図考察
57	寛 卯正月10 日		上塩尻村	助五郎	久四郎殿 女子	ろく			秋和村	庄屋 徳右 衛門⑩・仁 右衛門⑩	神宗長昌 寺	嫁出	久四郎	春原	家系図2・3. 女房は13歳下で宝暦7(1757)年時点で36歳。
58	正月27日		秋和村	庄屋 惣右 衛門	市兵衛女 房	さつ	23		上塩尻村	雲平			年名失念		
59	明和3年 戊辰正月朔 日	1766	下塩尻村	庄屋 万右 衛門	徳五衛女 子	ゆく	18	松城領新 地村神宗 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	忠之丞殿 仲政七殿 妻	嫁入り	政七	山崎	家系図18・5で後に忠之丞を嗣ぐ次男政七は明和3(1766)年の宗門改帳では 要助22歳男子とあり、翌明和4年も同名である。政七39歳としてあるのは 天明3(1783)年になってから。
60	未正月13 日		上塩尻村	助五郎	法花宗殿 治町本端 寺	すて		法花宗殿 治町本端 寺	常田村	庄屋 理右 衛門	留兵衛妻	嫁出	(元捨て 子)		
61	正月8日		上塩尻村	上塩尻村	左右衛門 殿娘				岡村?	浄土宗門 弟清兵衛 妻	浄土宗岡 村宗安寺	嫁出	浄土宗門 (藤兵衛)	春原	家系図善兵衛全左・3左右衛門は天明3(1783)年78歳で登場するまでは藤兵 衛で出ており、娘の記載はない。
62	送り一札 宝暦11年 巳正月	1761	御料所坂 木村	弘次右衛門 ⑩	号五兵衛 娘	れん	29	神宗満泉 寺	上塩尻村	助五郎	清五郎殿男子文右 衛門殿妻	嫁入り	清五郎 (文右衛 門)	山崎	家系図21・2別・2清五郎は、宝暦7(1757)年時点で太郎八30歳が輩頭者であ るが「代明四五右衛門 三年以前在二月江戸方穴落仕帳」で、文右衛門33歳 男子であったが、宝暦9(1759)年に先妻を亡くし、この時期に29歳の妻を 迎えている。
63	寛 正月16日		下塩尻村	万右衛門	九郎右衛 門女子	かん	19	浄土宗派 読部村芳 泉寺	上塩尻村	助五郎	新屋久次 郎殿妻	嫁入り	久次郎 (久・休 治郎)	春原	宝暦14(1764)年・明和3(1766)年時点で娘は登場せず。この六兵衛も家 系図に登場しない。
64	御帳 正月16日		上塩尻村	助五郎	六兵衛殿 娘				下塩尻村	万右衛門	貞兵衛娘	嫁出	六兵衛	馬場	家系図5・1五郎右衛門の息子である平三郎47歳男子は宝暦9(1759)年に三 郎右衛門になるが、先代より早く宝暦13(1763)年に53歳で死にます。その 女房は14歳年下で、そのとき39歳である。宝暦14(1764)年後家になるが、 明和3(1766)年までには消失。
65	子5月12 日		常田村	庄屋 善兵 衛	勘助殿抱 はつ				上塩尻村	助五郎	諏訪郡村 門休平三 郎妻	嫁入り	平三郎	山崎	家系図5・1五郎右衛門の息子である平三郎47歳男子は宝暦9(1759)年に三 郎右衛門になるが、先代より早く宝暦13(1763)年に53歳で死にます。その 女房は14歳年下で、そのとき39歳である。宝暦14(1764)年後家になるが、 明和3(1766)年までには消失。
66	巳正月9 日		大久保村	庄屋 要助 ⑩	常右衛門 男子	五郎八	26	浄土宗房 山村皇蓮 寺	上塩尻村	助五郎	徳右衛門 殿妻子翌	婿入り	五郎八	滝澤 (堀 田)	善兵衛佐兵衛5・2五郎八35歳は宝暦7(1757)年に明屋養子としてあり、女 房は30歳。
67	巳正月8 日		上塩尻村	助五郎	彦之丞殿 娘			浄土宗馬 村無量寺	手塚村	庄屋 八郎 右衛門	八右衛門 妻	嫁出	彦兵衛	北澤	宝暦7(1757)年北澤彦之丞の貫高1121貫をついでいると思われるのは孫北 澤家系図1・6七郎次5歳であるが幼少のため、祖父の輩頭者善兵衛で見る。
68	(不明点多し)												(不明)		
69	寛 亥11月		海野町	間屋次郎兵 衛⑩	伝五郎女 房		25	神宗房山 村大幡寺	上塩尻村	助五郎			龍 縁 回 状?		
70	寛保4年 子正月日	1744	坂木宿	関小右衛門 ⑩	関小右衛 門妹				上塩尻村	御役人中縁 組	張五兵衛 殿方へ縁 組	嫁入り	文 四 郎 (長五郎)	高遠	高遠家系図張五兵衛*1・3. 宝暦7(1757)年、長五郎28歳男子として付箋で この通りの嫁入りが見えたとされる。もともと、宝暦9年までに離縁したと考 えられる。
71	戊正月21 日		上塩尻村	助五郎	半五郎女 房		18	芳泉寺	下塩尻村	庄屋 万 大郎⑩	清七	離縁民し	半五郎	馬場	宝暦7(1757)年家系図2・2半五郎44歳輩頭者として0.352貫で登場。女房 は35歳なので、17年前の1740年の嫁入りか。
73	寛 戌正月		下塩尻村	庄屋 半右 衛門⑩	彦助妹	から	30	松城領新 地村神宗 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	久兵衛殿 妻	嫁入り	久兵衛	春原	宝暦7(1757)年家系図には現れないが久兵衛33歳輩頭者として0.881貫で 登場。女房は同年の33歳。
74	子正月 7日		下塩尻村	庄屋 万右 衛門	長次郎女 子	まで	33	松城領新 地村新望 寺	上塩尻村	助五郎	勘兵衛殿 妻	嫁入り	勘兵衛	小祝	従弟で宝暦7(1757)年時点で登場する女性なし
75	巳正月17 日		上塩尻村	助五郎	龜太郎殿 伯母				雁井沢村	庄屋 龜助 五郎⑩	龜助必藤 宗傳廟寺	嫁出	(不明)		

表 2 つづき

文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元名主	出自	名前	年齢	出宗旨	送り出し場所	送り出し先名主	送り出し先	66歳 認事項	上塩尻対象者	マケ	家系図考察
76	正月 11 日		大久保村	庄屋 要助 ⑤	常右衛門 男子	五郎八			上塩尻村	助五郎	庄屋 五右衛門 ⑤	神宗当村 龍穴寺	五郎八	滝澤 (塚田)	瀬澤佐治衛 5-2 五郎八 35 歳は宝暦 7 (1757) 年に期滿養子としてあり、女房は 30 歳。
77 覚	戌 正月 10 日		上塩尻村	助五郎	惣兵衛殿 従弟	さん			秋和村	次郎妻	神宗当村 龍穴寺	嫁出	惣五郎	原	
78 覚	辰 2 月 19 日		上塩尻村	助五郎	五郎右衛門 娘	もと	27		原町	三右衛門 妻 宗兵衛 ⑤	浄土真宗 新町向藏 寺	嫁出	五郎右衛門	山崎	宝暦 7 (1757) 年家系図 5-1 五郎右衛門 77 歳筆頭者として 2,501 貫でいる。娘の嫁入りはかり前と思われる。
79 覚	卯 正月		上塩尻村	助五郎	政右衛門 殿姪				山口村	喜右衛門 ⑤ 常右衛門 妻	原山村 神宗大幡寺	嫁出	政右衛門	滝澤	天明 3 (1783) 年参照番号 69 : 筆頭者 58 歳。
80	丑 正月 13 日		上塩尻村	助五郎	和助妻				坂木御殿 中之伏村	八右衛門 殿妹	安右衛門	継縁戻し		春原	宝暦 7 (1757) 年家系図市右衛門 4 利用 26 歳男五として登場。女房は 3 歳年下 33 歳。とまろが宝暦 13 (1763) 年に 1 歳年下の女房に。宝暦 12 (1762) 年に離縁し、新たな女房をむかえたか。あるいは記載の誤りを訂正したか。
81	未 正月 12 日		上塩尻村	助五郎	伝七殿姪				下塩尻村	庄屋 万右衛門	佐左衛門 妻	嫁出	(不明)		
82 一札之事 寛延武年 巳正月	1749		上塩尻村	助五郎	□之助殿 姪	たけ	22		岩井田領 殿治村	常右衛門 ⑤	神宗二て 当村龍園 寺	嫁出	(不明)		
83 覚	巳 正月 14 日		上塩尻村	助五郎	權之助殿 姪				柳田村	市右衛門 常兵衛抱 殿兵衛妻	柳田村 浄土宗法興 院	嫁出	(不明)		
84 覚	西 正月 9 日		上塩尻村	助五郎	甚七殿娘	はや			下塩尻村	庄屋 半右衛門	又四郎妻	嫁出	三治郎	北澤	宝暦 7 (1757) 年家系図北澤甚之丞 4 三治郎 37 歳筆頭者として登場。
85	西 正月 12 日		上塩尻村	助五郎	清八殿姉				下之条村	庄屋 四右衛門	乙助妻	嫁出	(不明)		
86 御根	西 正月 13 日		下塩尻村	庄屋 万太郎	源七姪	あき	17		浄土宗すわべ村芳泉寺	義右衛門 殿娘		嫁入り	半五郎 (儀右衛門) 71	馬場	宝暦 7 (1757) 年家系図 2-2 半五郎 44 歳筆頭者として 0,352 貫で登場。女房は 35 歳なので、17 年間の嫁入りか。
87 覚	正月 12 日		上塩尻村	助五郎	三五郎殿 姉				秋わ村	庄屋 清右衛門 ⑤	太郎兵衛 妻	嫁出	(不明)		
88 覚	西 正月 10 日		上塩尻村		清八殿姪	あき	19		ならを村	甚四郎仲 妻	町屋村 真言宗西光 寺	嫁出	(不明)		
89	西 正月 16 日				甚兵衛家 内四人					清兵衛方 へ引越	引越し (出入り先不明)	(不明)	(不明)		
90	西 正月		中吉田村	庄屋 長左衛門 ⑤	藤多助 従弟	しの	23		本海野洲 宗鳳善寺 庭錦	藤多又助 仲助七妻		嫁入り *			
91	申 正月 9 日		上塩尻村	助五郎	左五右衛門 殿娘	あき	19		岩門村	庄右衛門	藤藏仲万 右衛門妻 寺	嫁出	佐五右衛門 (四五右衛門) ⑤	山崎	宝暦 7 (1757) 年家系図には現れないが佐五右衛門系統として四五右衛門 48 歳筆頭者として 1,284 貫で登場。息子吉太郎が佐五右衛門貫高を嗣ぐが、この時点で 18 歳でこの娘とおそろくその姉妹。
乍忍願之通按御付可被下候	子 12 月		上塩尻村	平左衛門 ⑤・儀右衛門 ⑤	平左衛門 弟	半平	20		坂木御料 柳尾村	松城領新 地村耕雲 寺	松城領新 地村耕雲 寺	養子出し ③	平左衛門 (30 と同 じ)	佐藤	半平は出現せず。平左衛門にしても宝暦 7 (1757) 年段階では本人は家系図で確認できない。が男子藤吉 4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 よりと思われる。平三郎は 14 年間に養子出。
93	辰 正月 11 日		上塩尻村	助五郎	平左衛門 殿妹				鳥越村	文四郎 ⑤	神宗当村 仲兵衛妻 東昌寺	嫁出	平左衛門 (30 と同 じ)	佐藤	宝暦 7 (1757) 年段階では本人は家系図で確認できない。が男子要吉 4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 よりと思われる。平三郎は 14 年間に養子出。
94 覚	巳 正月 20 日		上塩尻村	助五郎	助左衛門 姉	さよ			塩崎村	庄屋 唯右衛門 ⑤	藤五郎仲 吉治郎 寺	嫁出	助左衛門	清水	宗門改題に天明 3 年助左衛門として現れる万太郎 (家系図 1-8) は宝暦 7 (1757) 年時点で助子 11 歳。その時点で筆頭者は文太郎 (家系図 3-4) 28 歳で女房はいない。母娘は 65 歳。

表 2 つづき

文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し場所	送り出し名主	送り出し先	送り出し先宗旨	上場見対象者	マケ	家系図考察
95 返書	享保5年 正月十日		上塩尻村	助五郎	五郎右衛門 門殿男子 平三郎殿妻				秋わ村		金之丞姉 寺	神宗長昌 寺	平三郎 (65と 同 じ)	山崎	家系図5-1 五郎右衛門の息子である平三郎47歳男子は宝暦9(1759)年に三郎右衛門になるが、先代より早く宝暦13(1763)年に53歳で死にます。その女房は14歳年下で、そのとき39歳である。宝暦14(1764)年後家になるが、天明3(1766)年までには消失。
96			上塩尻村	助五郎	塚田安右衛門 門殿妹				坂木領中之条村	八右衛門⑩			(不明)	滝澤	天明3(1763)年
97 覚	延享5年 辰辰正月八日	1748	上塩尻村	助五郎	伴七殿娘				坂木領中之条村	八右衛門⑩	文助弥次 吉妻	浄土宗二 重当村西 條寺	妻六(伴 七名義)	滝澤	天明3(1763)年歳満家系図1-4 妻六49歳産頭者まで伴七名義の貴高0.783貫は存在したが諸人員が見出せず。年齢からして彼の娘ではないと思われる。
98 覚	子正月七日		上塩尻村	助五郎	左五右衛門 門殿娘				下塩尻村	庄屋 万右衛門⑩	仁右衛門 寺	浄土宗芳 集寺	91と 同 じ、佐五 右衛門 (四五右 衛門)	山崎	宝暦7(1757)年家系図には現れないが佐五右衛門系統として四五右衛門48歳産頭者として1284貫で登場。息子吉太郎が佐五右衛門貴高を嗣ぐが、この時点で18歳でこの娘とはおそらくその姉妹。
99 送り状之事	正月七日		坂木領中之条村		伝兵衛女 子		19	浄土宗二 重当村西 條寺	上塩尻村	助五郎	助左衛門 殿方江道 シ		助左衛門	清水	宗門改帳に天明3年助左衛門として現れる万太郎(家系図1-8)は宝暦7(1757)年時点で男子11歳。その時点で産頭者は文太郎(家系図3-4) 28歳で女房はいない。母親は65歳。
100 覚	寛保3年 亥正月十二日	1743	上塩尻村	助五郎	五郎右衛門殿 三郎殿女房	殿伴平	24		眞宿村	庄屋 市郎兵衛⑩			平三郎 (65と 同 じ)	山崎	家系図5-1 五郎右衛門の息子である平三郎47歳男子は宝暦9(1759)年に三郎右衛門になるが、先代より早く宝暦13(1763)年に53歳で死にます。その女房は14歳年下で、そのとき39歳である。宝暦14(1764)年後家になるが、天明3(1766)年までには消失。
101 覚	享保18年 正月十日		上塩尻村	助五郎	助太即職 従弟	はつ			大久保村	庄屋 安右衛門⑩	安右衛門 仲善兵衛 妻		助太郎	滝澤	宝暦9(1759)年歳満佐治兵衛32歳佐治として0.284貫で登場。宝暦7(1757)年に、春て(すて)に嫁養子か、はつに該当する女子は見当たらず。
102 一札之事	享保18年 十一月	1733	松平九郎 左衛門支 配所和田 村		郷右衛門⑩ 娘			真言宗普 薩寺	上塩尻村	助五郎	平左衛門 妻		平左衛門 (39と 同 じ)	佐藤	宝暦7(1757)年家系図では本人は家系図で確認できない。が男子要吉4歳は家系図7-3であるので、家系図7-2でよいと思われる。平三郎は14年間に養子出。
103	亥正月十一日		下之郷村		庄屋 伝左衛門	三之丞	50		上塩尻村	助五郎	海内殿後 家方江御 後次		彦内名義 小室山		三之丞は現れず。
104 覚	享保18年 正月十一日		下之郷村		庄屋 伝左衛門	すへ	23		上塩尻村	助五郎	八郎兵衛 殿妻		八郎兵衛	佐藤	宝暦7(1757)年家系図には現れないが佐藤家系図4-3 清左衛門37歳の兄45歳として登場。宝暦7(1757)年には、女房は10歳年下の35歳。
105 覚	宝暦5年 亥正月	1755	坂木領中之条村		平吉女子	ね	21	柳屋村神 宗普雲寺	上塩尻村	助五郎	妻之丞殿 弟兵衛妻		長藏	小祝	宝暦7(1757)年家系図には現れないが小祝家系図3-2 長四郎41歳の従弟32歳として登場。宝暦7(1757)年には、女房は9歳年下の23歳。天明3年参照番号6445歳(宝暦7(1757)年)
106 送り状之事	寛保3年 亥正月十六日	1743	御料所坂 木村		組下新町 市之丞娘		18	当村神宗 満興寺	上塩尻村	助五郎	平右衛門 殿子息武 平次妻		六太(平 右衛門名 義)	馬場	宝暦7(1757)年家系図6-2 六太31歳男として平右衛門名義の0.902貫を保持。女房はその時点で1歳上の32歳。
107 覚	子正月十八日		上塩尻村	助五郎	六郎殿娘				大久保村	庄屋 安右衛門⑩	惣吉妻		又治郎 (又助-4)	馬場	宝暦7(1757)年家系図6-2 又治郎33歳従弟がこれにあたるか。もともと、該当する娘はおらず先代の可能性あり。
108 指し申一札之事	宝暦12年 正月五日	1762	岩村田領 平尾村		才兵衛娘	しま	27	佐久郡平 尾村神宗 寺芳院	上塩尻村	助五郎	妻右衛門 妻		(不明)		佐藤家系図2-4、筆頭者八右衛門の兄として登場。宝暦7(1757)年45歳の時点で妻なし。
109 送状之事	享保19年 寅十二月	1734	和田村		彦右衛門⑩ 娘	てう	17	真言宗普 薩寺	上塩尻村	助五郎	庄右衛門 妻		庄右衛門	佐藤	高遠家系図3-6であるが、明和4(1767)年時点で11歳であり、天明3(1763)年に27歳で女房が21であるので、どうか。
110 覚	午正月		鍛冶町		殿治河助 七後家娘	すめ	22	神宗元海 野興寺	上塩尻村	助五郎	松次即職 妻		松次郎	高遠	
111												4訂 正 (娘一姫)			基右衛門はこの時期の宗門改帳に登場せず。初之助は菅沼(天明参照番号75)のユニットに宝暦7(1757)年に18歳で登場。妻帯の記述がないままに、宝暦13(1763)年に24歳で「付属」去三月松原松成御領新地村消滅へ妻子に限り申帳
112 覚	卯正月十二日		上塩尻村	助五郎	曾右衛門 女子				新地村	良右衛門⑩	親庄次郎 方江		(不明)		
113	不明点多い												(不明)		

表 2 つづき

文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し場所	送り出し名主	送り出し先	送り出し先宗旨	上塩尻対象者	マケ	家系図考察
114 下藤快一 札之事	元文二年 巳六月廿 二日	1737	田町	町人主・横 助印・同所 諸人勘兵衛 ⑩	文次郎	文次郎		浄土宗二 面同浄 四寺	上塩尻村	助五郎	宇右衛門 棟へ御奉 公	御雇	宇右衛門 山崎?春 原?		家系図考察
115	宝暦3年 西正月	1753	田中村	庄屋 平三 郎⑩	平七女子	きく	17	当村真言 宗長久寺	上塩尻村	助五郎	彦右衛門仲庄之助 殿妻	嫁入り	庄之助	小宮山	宝暦7 (1757) 年小宮山家系図には現れないが、庄之助36歳男子は女房91歳とともにより、その母彦右衛門所亡の後の実家の実家へ夫婦養子として出る (「付箋」田中村平七歳子に遺言帳)。
116 覚	西正月15 日		常田村	庄屋 理右 衛門⑩	四郎左衛 門女子	さん	24	神宗殿治 町月意寺	上塩尻村	助五郎	忠之丞殿 男子忠次 郎妻	嫁入り	忠次郎	山崎	忠之丞の男子として、宗門帳には忠次郎は登場せず。この時期には佐藤家に。
117 覚	寛政正月12 日		上塩尻村	助五郎	曾右衛門 女子			庄屋 平四 郎⑩	金郷寺村		甚之丞妻 宗良泉寺	嫁出	(不明)		
118	正月9日		上塩尻村	助五郎	三次郎殿 妹			庄屋 万右 衛門⑩	下塩尻村		平八郎貞 地村神宗 四郎	嫁出	三治郎	北澤	宝暦7 (1757) 年家系図には現れないが武兵衛45歳重臣者としてあり、女房はその時点で10歳下で35歳。したがって嫁入りは18年前の1739年頃。
119 覚	西正月8 日		榎井沢村	庄屋 孫助 ⑩	藤助弟藤 次郎女房		33		上塩尻村	助五郎	御妻兵衛 方へ	離縁出展 り	北澤	宝暦7 (1757) 年北澤彦之丞の貫高1121貫をついでいると思われるのは孫北澤家系図1-6七郎次5歳であるが幼少のため、祖父の重臣者彦兵衛で見る。	
120 覚	西正月11 日		秋和村	庄屋 清石 新門⑩	榎平妹	とめ	17	神宗秋和 村濃沢寺	上塩尻村	助五郎	半右衛門 殿作武兵 衛殿妻	嫁入り	武兵衛	馬場	宝暦7 (1757) 年家系図には現れないが武兵衛45歳重臣者としてあり、女房はその時点で10歳下で35歳。したがって嫁入りは18年前の1739年頃。
121 覚	西正月9 日		下塩尻村	庄屋 石衛門	文右衛門 孫	さん	19	神宗秋和 領新地村 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	六兵衛殿 娘	嫁入り	六兵衛	馬場	宝暦14 (1764) 年・明和3 (1766) 年時点では娘は登場せず。この六兵衛も家系図に登場しない。
122 覚	西正月9 日		下塩尻村	庄屋 右衛門	文四郎症 弟	はつ	24	神宗秋和 領新地村 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	小兵衛殿 妻	嫁入り	小兵衛	清水	清水家系図20.9小兵衛は、天明3 (1789) 年小佐衛門47歳従弟として1歳歳下女房46歳とあるが、それ以前には現れない。なお、小兵衛として宝暦13 (1763) 年に27歳で登場するまでは離縁。
123 覚	亥正月		山口村	庄屋 兵衛⑩	喜治助女子	さん	25	秋和村神 宗長昌寺	上塩尻村	助五郎	八郎殿妻	嫁入り	(不明)		
124 覚	正月13日		下塩尻村	庄屋 右衛門	庄兵衛姫 より		28	松城新地 村神宗 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	太次右衛 門殿妻	嫁入り	太次右衛 門	高遠	宝暦7 (1757) 年高遠家系図2-2庄之助48歳従弟としてあり、その女房は3歳下であるので、このつとだとすると、嫁入りは6年前、1751年頃か。
125 覚	亥正月11 日		上塩尻村	助五郎	甚右衛門 殿女子	とり	26		秋わ村		由兵衛妻 寺	嫁出	神宗長昌 寺		甚右衛門はこの時期の宗門改帳に登場せず、初之助は普沼 (天明期参照巻75) のユニットに定宝暦7 (1757) 年に18歳で登場、重臣の記述がないままに、宝暦13 (1763) 年に24歳で「付箋」去三月離縁松城御新地村清へ養子に罷り申候」
126 覚	未正月11 日		常田村	庄屋 理右 衛門⑩	太兵衛女 房	つし	39	浄土宗二 面中之森 村西念寺	上塩尻村	助五郎	従弟丑之 助殿方江	離縁出展 り	丑之助 つち	寺田	宝暦7 (1757) 年寺田家系図2-1丑之助36歳重臣者として0.03貫で登場。従弟つちが33歳であり、宝暦11 (1761) 年嫁女が37歳のとき、嫁入りするが「付箋」〔寛正月常田常田村太兵衛に縁付還申候〕、2年後に離縁で従弟に戻っている。
127 遠林之事	西正月12 日		横科郡中 ノ条村	九兵衛⑩	庄左衛門 女子	いよ	19		上塩尻村	助五郎	平弥方	嫁入り	甚右衛門	春原	宝暦13 (1763) 年 (付箋) 春原家系図惣右衛門3として甚右衛門26歳重臣者では0.544貫で登場。それ以前は種八、もともと、娘とりというのではおそらく先代。
128 覚	元文6年 西正月	1741	林之郷	庄屋 七左 衛門⑩	筑後女子	きく	27	上草木村 神宗龍洞 院	上塩尻村	助五郎	喜八殿妻	嫁入り	喜八 (六 太)	春原	女房7 (1757) 年家系図惣八ノ六太42歳従弟として貫高0.846貫であるが、女房は15歳であり、宝暦11 (1761) 年嫁女として貫高0.846貫であるが、こちらは後妻と思われる。
129 覚	子正月13 日		上塩尻村	助五郎	佐右衛門 殿従弟	まつ	18		秋和村		金平妻 七左衛門・徳 (判頭)	嫁出	佐右衛門 (三太郎)	馬場	宝暦9 (1759) 年馬場家系図14.3として養子に入った三太郎は宝暦11 (1761) 年男子36歳、佐右衛門殿後妻女房としてその時点ではおらず、宝暦11 (1761) 年に18歳である。そして宝暦13年までには消滅する。
130	亥4月23 日		手塚村	庄屋 八郎 右衛門⑩	八右衛門 女房		36	手塚村浄 土宗無量 寺	上塩尻村	助五郎	隆之丞殿 方へ	離縁出展 り (67)	彦兵衛	北澤	宝暦7 (1757) 年北澤彦之丞の貫高1121貫をついでいると思われるのは孫北澤家系図1-6七郎次5歳であるが幼少のため、祖父の重臣者彦兵衛で見る。
131 覚	卯正月9 日		下塩尻村	庄屋 右衛門	忠之丞女 子	のう	19	神宗松城 領新地村 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	半弥殿仲 松右衛門 殿妻	嫁入り	松右衛 門・半弥 (茂太郎)	佐藤	佐藤家系図3.3として、上位分家であるが、そう言えば、宝暦7 (1757) 年茂太郎27歳男子、貫高1.113貫であるが宗門改帳上では女房を最後まで見ない。

表 2 つづき

文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元 名主	出自	名前	年齢	出自宗旨 場所	送り出し 場所	送り出し元 名主	送り出し先	送り出し先宗旨	上塩尻 対象者	マケ	家系図考察	
132 覚	戊正月		上塩尻村	助五郎	伝之丞殿 女子	まつ	18	生塚村	生塚村	庄屋 宇兵衛 新助	清左衛門 物勝之助 妻	新町浄土 真宗向願 寺	伝之丞	原?		
133	寅正月 11 日		上塩尻村	助五郎	曾右衛門 殿姪			小泉組下 之条村	小泉組下 之条村	庄屋 三郎 兵衛	七右衛門 助子安七 妻	上室賀村 上室前田 寺	(不明)			
134 選状之事 御正月 10	1747		坂木村	定四郎	坂木町定 之丞娘	かん	18	当村神宗 大莫寺	上塩尻村	助五郎	与左衛門 妻		与左衛門	原		
135 一札之事 宝暦 4 年 戊辰正月 9 日	1754		科所長瀬 村	市左衛門	小四郎娘	まつ	17	岩村御領 飯沼村 神宗 龍興寺	上塩尻村	助五郎	惣助殿 從妻次郎 妻		嫁入り	春原	源之丞 2 (藩六・2 で宝暦 9 (1759) 年に 46 歳で娘にちゆう 8 歳でいる。明和 4 (1767) 年に 16 歳で、後はたどれないが。	
136	子 11 月 日		上塩尻村	助五郎	八右衛門 殿妻			別所村神 宗安楽寺	福田村	庄屋 平四郎 郎	平四郎娘	別所村神 宗安楽寺	八右衛門	佐藤	宝暦 7 (1757) 年佐藤家系図 2・4 八右衛門 36 歳は佐藤家分家筆頭で筆頭者であったが、その時点で女房はおらず、宝暦 9 (1759) 年になり 38 歳で、27 歳という 11 歳年下の女房をもっている。	
137	戌正月		秋和村	庄屋 七左 衛門・徳 左衛門	喜兵衛 (姫)	きち	16	瀬 助 形 井 寺	上塩尻村	助五郎	八郎殿妻		(不明)			
138 一札之事 明和 3 年 戊辰正月	1766		上塩尻村	助五郎	定四郎殿 娘	かや		坂木立町	坂木立町	八五郎	喜右衛門 松瀬下村 門妻	浄土新宗 松瀬下村 正徳寺	嫁出	普沼	宝暦 13 (1763) 年普沼家系図 3・4 定四郎 26 歳は貫高 0.415 貫であるが、前後独身で若いので、先代の話と思われる。	
139 覚	亥正月 12 日		上塩尻村	助五郎	文弥殿 從弟	太郎八		秋和村	秋和村	庄屋 七左 衛門・徳 左衛門	源六郎殿 妻	神宗長昌 寺	(不明)			
140 覚	申正月 10 日		秋和村	庄屋 五右 衛門	代次郎妹 つね		23	神宗秋和 村龍沢寺	上塩尻村	助五郎	喜右衛門 殿妻	いせ山村 神宗徳泰 寺	嫁入り	市右衛門 春原	宝暦 7 (1757) 年家系図には現れないが市右衛門 51 歳筆頭者として登場。女房は同年の 40 歳であり、これだとすると縁組は 17 年前 1740 年頃。	
141 覚	卯正月		上塩尻村	助五郎	半平次殿 女子			大久保村	大久保村	庄屋 安右 衛門	伝六弟勝 兵衛妻		嫁出	宇平治 荒木		
142 覚	酉正月		生塚村	庄屋 宇兵 衛	三右衛門 姉	はな	30	秋和村神 宗長昌寺	上塩尻村	助五郎	幸右衛門 殿妻		嫁入り	馬場?		
143 萬願寺井 出入請伏 書 子正月 吉 日	1732												(不明)			
144 奉願上口 上書之御 事 子正月 6 日			上塩尻村		平左衛門			江戸卓橋 巻丁目	江戸卓橋 巻丁目	申州屋半左衛門所 たばこ荒参		江戸へタ バコ売り	平左衛門 佐藤 (39 と同 じ)	佐藤	半平は出現せず。平左衛門にしても宝暦 7 (1757) 年段階では本人は家系図で確認できない。が男子寛喜 4 歳は家系図 7・3 であるので、家系図 7・2 でよいと思われる。平三郎は 14 年前に薨出。	
145 奉願上口 上書之御 事 子正月 7 日			上塩尻村		文蔵・龍 正院			伊勢参宮	伊勢参宮	伊勢坂け			文蔵	春原	春原は次右衛門系に近いと思われるが、行商などであり住着しなかったか。かつらうじて、宝暦 11 (1761) 年に文蔵後家がこれにあたる。	
146 奉願上口 上書之御 事 子 2 月 10 日			上塩尻村		久次良妹			神宗松城 領新地村 龍雲寺	堀村	源助妻	同宗本海 野英神寺		嫁出	久次郎 (久・休 治郎)	春原	
147 乍恐奉願 上口上書之 御事 子正月 23 日			上塩尻村		六助娘		20	神宗松城 領新地村 龍雲寺	永瀬村	惣吉妻	神宗永瀬 村長正寺		嫁出	又 治郎 (六助・4)	馬場	宝暦 7 (1757) 年家系図六助・4 又治郎 33 歳從弟がこれにあたるか。もともと、該当する娘はおらず先代の可能性高し。
148 乍恐奉願 上口上書之 御事 子正月 日			松城須原 宿		金太郎娘			神宗松城 領新地村 龍雲寺	上塩尻村		平左衛門 娘	神宗松城 領新地村 龍雲寺	嫁入り	佐藤	半平は出現せず。平左衛門にしても宝暦 7 (1757) 年段階では本人は家系図で確認できない。が男子寛喜 4 歳は家系図 7・3 であるので、家系図 7・2 でよいと思われる。平三郎は 14 年前に薨出。	
149 乍恐奉願 上口上書之 御事 子正月 23 日			坂木額神 師屋村		庄兵衛妹		16	神宗同領 見鳴村調 照寺	上塩尻村		神子日向 福正 院	神子宗下 塩尻村 福正 院	嫁入り			
150 乍恐奉願 上口上書之 御事 子正月 23 日			上塩尻村		角右衛門從弟彦内 後家		39	神宗秋和 村龍沢寺	伊勢山村	三之丞	神宗伊勢 山村陽泰 寺	嫁出	彦内名義 小宮山		三之丞は現れず。	

表 2 つづき

文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し場所	送り出し先名主	送り出し先	送り出し先宗旨	上塩尻対象者	マケ	家系図考察
乍忍奉願口上書之御事	子正月23日		松城領風宿村		金兵衛娘		21	松城領新地村耕雲寺	上塩尻村		平右衛門娘	松城領新地村耕雲寺	平右衛門	春原	天明3(1783)年に初めて宗門願に登場する平右衛門34歳男子には32歳の女房がいるが、これに該当するのかわからない。
乍忍奉願口上書之御事	子正月23日		上塩尻村		久左衛門娘		20	真言宗当村東福寺	下塩尻村		久之丞娘	瑞宗松城領新地村耕雲寺	久左衛門	清水	
乍忍奉願口上書之御事	子正月23日		上塩尻村		弥五左衛門弟松内俊家40女子つき			浄土宗願訪村芳泉寺	坂本領金井村		新七妻子	瑞宗松城領新地村耕雲寺	弥五左衛門	馬場	
乍忍奉願口上書之御事	子正月23日		上塩尻村		善右衛門女房		26	浄土真宗新町向源寺				瑞宗松城領耕雲寺	善右衛門	佐藤	
乍忍奉願口上書之御事	子正月23日		上塩尻村		文助兄	元助	43		大日向村				(不明)		
乍忍奉願口上書之御事	子2月25日		上塩尻村		半十郎弟	九之助	68	下塩尻村福正院		菩提寺下塩尻村福正院		朝愛出家	(不明)		
乍忍奉願口上書之御事	子2月28日		上塩尻村		五郎				江戸御屋敷		井上七右衛門様二	江戸屋敷	(不明)		
乍忍奉願口上書之御事	子2月28日		上塩尻村		加助				江戸御屋敷			野村七兵衛	寛助(又次郎)	春原	源之丞2(源六)2で宝暦9(1759)年に46歳で娘にちゆう8歳でいる。明和4(1767)年に16歳で、後はたどれないが。
指上御願口上書之御事	享保17年子2月	1732	上塩尻村		権八				江戸御屋敷		津久井定右衛門様	中間奉公出	寛八(又次郎)	春原	宝暦13(1763)年(付箋)春原家系図で右衛門3として基右衛門26、義善源者は0.34貫で登場。それ以前は輸入。もつとも、娘というのはおそらく先代。
160	子11月		上塩尻村		伝右衛門印				江戸		久保天徳寺門前万應清兵衛方	江戸へタバコ売り	伝右衛門(三次郎)	馬場	宝暦9(1759)年、馬場家系図14.3として養子に入った三次郎は宝暦11(1761)年に男子36歳としてあり、衛右衛門後家を女房として。その時点で28歳としてもつ。もつとも、佐助にはまっつはおらず、ききが宝暦11(1761)年に18歳である。そして宝暦13年までには消滅する。
161	子11月		上塩尻村		半平印				江戸		京橋寺丁目甲州屋半左衛門方	江戸へタバコ売り	(不明)		
春原上注進書之御事	子11月		上塩尻村		平左衛門印				松城領新地村		松城領新地村弥左兵衛	継縁戻し	平左衛門	佐藤	宝暦7(1757)年段階では本人は家系図で確認できない。が男子要吉4歳は家系図7.3であるので、家系図7.2でよいと思われる。平三郎は14年前に養子出。
163	子2月		上塩尻村		文蔵				江戸		本村木町三目師屋堂兵衛方	江戸へタバコ売り	文蔵	春原	春原左次右衛門系に近いと思われるが、行商などであり定着しなかったか。からうじて、宝暦11(1761)年に文蔵後家が70歳で登場する。
164	寛保4年子正月12日	1744	坂木村	定四郎	文平妹	まら	21	浄土宗心光寺	上塩尻村	助五郎	佐兵衛御与平治妻	繰入り	与平(又右衛門)	原	宝暦7(1757)年家系図7.3与平次45歳兄弟として4.812貫で登場。女房は34歳なので、13年前の1743年の嫁入りか。記録と合う。

以上のような留意点の重なりがあることを念頭に置き分析をおこなう。

送り主あるいは受け主区別せずに見ると、宗門改帳および家系図の照合により、

荒木 1 北澤 5 小祝 4 小宮山 1
佐藤 20 清水 7 菅沼 3 高遠 4 高
見澤 2 滝澤 10 塚田 1 寺田 1 馬
場 15 原 7 春原 22 山崎 14

と、計 126 件になる。この数値だけ見ると、いわゆる出入りの多いマケとは、春原 (22)・佐藤 (20)・馬場 (15)・山崎 (14)・滝澤 (10)・清水 (7)・原 (7)、と春原がトップではあるが、上塩尻八家がそのまま入っている。後の比較的小規模のマケの分布もさまで意外ではない。

嫁出入りの年齢が出ているのは 83 件である。その内、男性の事例は 6 件となる。

男子で上塩尻村から出て行ったのは 4 名である。

まず参照番号 39 の覚において、延享 2 (1745) 年丑正月に、平左衛門殿弟平三郎 23 歳が坂木領横尾村五郎兵衛の養子に出ている。この平左衛門は佐藤家であるが家系図には出てこない。だが、宗門改帳の宝暦 7 (1757) 年段階では佐藤マケの家ユニットに記載があり (50 歳、天明 3 年参照番号 62 に引き続くユニット)、その男子要吉 4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。宝暦 7 年時点で見ると、平三郎は 14 年前に養子に出たものの、そのときまでに少なくとも宗門改帳において禅宗横尾村耕雲寺で檀那寺は変わらないため、矛盾なく現れるものと推断する。なお、参照番号 92 の子 12 月、上塩尻村の平左衛門弟半平 20 歳が、坂木御料横尾村甚四郎養子として出ている。これも養子として出たからか、佐藤家系図に半平は出現しない。

さらに参照番号 155 年恐奉願口上書之御事として、某年子正月 23・27 日文助兄元助 43 歳が大日向村在の御家中野原関左衛門様養子として出て行ったが、これ以上の情報は無い。また、

参照番号 156 子 2 月 25 日半十郎弟九之助 68 歳が菩提寺である下塩尻村福正院において剃髪出家したことについてもこれだけの記載である。

また、男子で村外から上塩尻村に入ってきたのは、参照番号 66 の巳正月 9 日、大久保村庄屋 要助からの状で、常右衛門男子五郎八 26 歳 (浄土宗房山村呈蓮寺) が当村徳右衛門殿養子掣として婿入りしたものである。彼は宝暦 7 (1757) 年に滝澤 (塚田) マケの家ユニットにおい瀧澤佐治兵衛 5-2 五郎八 35 歳甥掣養子としてあり、女房は 30 歳である。もう 1 件は、参照番号 103 で某年亥正月 11 日下之郷村 庄屋伝左衛門を経て、三之丞 50 歳 (下之郷村禅宗陽泰寺) が彦内殿後家方江掣後次として、跡継ぎ養子入りをしている。彦内名義は小宮山であるが、この記載以外には小宮山家系図および宗門改帳にも三之丞は現れない。

これら 6 件の男子を除く 77 件は女子の事例であり、平均年齢 (数え) は 22.5 歳である。中央値も 22 歳である。入ってきたのが 56 件で、出て行ったのが 21 件となる。年齢の不明な事例を含めた全体では、上塩尻に入ってきたのが 78 件で出ていったのが 83 件あるため、入ってくる場合の記載は 72% と高いのに対し、出て行った場合には 25% で、開きが大きい。

以上、全体としての概要を押さえたところで、以下マケ毎に件数の多い順から見ていく。

【春原家】(表 3)

春原家は 163 件中 22 件と全体の 8 分の 1 (13%) を占める件数を出しているが、もともとマケとしての人口規模は上塩尻村で最も大きい。そのため、人数に比例するとも言える。この 22 件中文書自体に年号の記載があるのは 3 件のみである。まず最古の 1 件は享保 17 (1732) 年子 2 月のもので、参照番号 159 の指上申御請状之事であり、上塩尻村権八が城戸村津久井定右衛門様に中間奉公に出るという内容である。この権八は、その名前からしてやはり権八 (甚

表 3 春原家

参照 番号	文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し 元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し 場所	送り出し 先名主	送り出し先	異動事由	上塩尻 対象者	マケ	家系図考察
1 51	御帳	申正月十日		下塩尻村 石衛門	庄屋 万 石衛門	嘉兵衛女 子	よく	23	浄土宗二 門・諏訪部 村芳泉寺	上塩尻村	勘五郎	藤五郎妻	嫁入り	藤五郎	春原	家系図平右衛門・4 藤五郎は宝暦 7 (1757) 年に 50 歳輩頭者である。9 歳年 下の女房は 41 歳で、後も嫁わずにいくので、18 年前、1739 年の嫁入りか。
2 63	覚	正月 16 日		下塩尻村	方右衛門	九郎右衛 門女子	かん	19	浄土宗源 助部村芳 泉寺	上塩尻村	勘五郎	新屋久次郎 殿妻	嫁入り	久次郎 (久・休 治郎)	春原	
3 73	覚	戌正月		下塩尻村	庄屋 半 右衛門⑩	彦助妹	から	30	松城領新 地村神宗 耕雲寺	上塩尻村	勘五郎	久兵衛殿妻	嫁入り	久兵衛	春原	宝暦 7 (1757) 年家系図には現れないが久兵衛 33 歳輩頭者として 0.381 貫 で登場。女房は同年の 33 歳。
4 25		巳正月		秋和村	庄屋 仁 右衛門⑩	嘉右衛門 女子	はつ	18	諏訪部村 浄土宗二 門・芳泉寺	上塩尻村	勘五郎	五左衛門殿 貞子八三郎 妻	嫁入	五左衛門	春原	宝暦 7 (1757) 年三張 23 歳期としてあるのが、寛政 10 (1798) 年 63 歳徒 弟までに春原五左衛門として筋目を繼いだ形になっている。
5 140	覚	申正月 10 日		秋和村	庄屋 五 右衛門⑩	代次郎妹	つね	23	神宗秋和 村龍沢寺	上塩尻村	勘五郎	市右衛門殿 妻	嫁入り	市右衛門	春原	宝暦 7 (1757) 年家系図には現れないが市右衛門 51 歳輩頭者として登場。 女房は同年の 40 歳であり、これだとすると縁組みは 17 年前 1740 年頃。
6 151	乍悲傷願口 上巻之御事	子正月 23 日		松城領狐 宿村		金兵衛娘		21	松城領新 地村耕雲 寺	上塩尻村		平右衛門殿	嫁入り	平右衛門	春原	天明 3 (1783) 年に初めて宗門帳に登場する平右衛門 34 歳男子には 32 歳 の女房がいるが、これに該当するのは不明。
7 127	退秋之事	西正月 12 日		埴科郡中 ノ桑村	九兵衛⑩	庄左衛門 女子	いよ	19	浄土宗二 門中之様 村西念寺	上塩尻村	勘五郎	平弥方	嫁入り	嘉右衛門	春原	宝暦 13 (1783) 年 (付箋) 春原家系図惣右衛門・3 として嘉右衛門 26 歳輩 頭者は 0.544 貫で登場。それ以前は難人。もっとも、娘とりというのはお そらく先代。
8 22	口上	戌正月 11 日		狐宿村	庄屋 八郎右衛 門⑩	孫右衛門 女子	いち	21	神宗耕雲 寺	上塩尻村	勘五郎	久四郎殿妻	嫁入	久四郎	春原	家系図 2-3、女房は 13 歳下で宝暦 7 (1757) 年時点で 36 歳。
9 46	覚	未正月 13 日		房山村	庄屋 忠 助⑩	孫右衛門 男子	太七		上青木村 神宗龍洞 院	上塩尻村	勘五郎	久次郎殿女 子致	嫁養子入 り	(不明)	春原?	
10 12	覚	西 4 月		本郷村	彦兵衛⑩	久藏妹	へん	25	真言宗西 前山村中 神宗	上塩尻村	勘五郎	幸八殿妻	嫁入	幸八	春原?	幸八という名前が宗門改帳に登場するのは、天明 8 (1788) 年 64 歳、太七 72 歳の弟として。その時点で女房は 60 歳。
11 135	一札之事	宝暦 4 年 戌 正月 9 日	1754	科所長瀬 村	市左衛門 ⑩	小四郎娘	まつ	17	岩村田御 領飯沼村 神宗 龍洞寺	上塩尻村	勘五郎	急助殿従弟 又次郎妻	嫁入り	嘉助 (又 次郎)	春原	源之丞 2 (源六)・2 で宝暦 9 (1759) 年に 48 歳で娘にちゆう 8 歳でいる。 明和 4 (1767) 年に 16 歳で、後はたどれないが。
12 128	覚	元・文 6 年 酉 正月	1741	林之郷	庄屋 七 左衛門⑩	筑後女子	きく	27	上青木村 神宗龍洞 院	上塩尻村	勘五郎	喜八殿妻	嫁入り	喜八 (六 太)	春原	宝暦 7 (1757) 年家系図喜八・1 六太 42 歳従弟として貫高 0.846 貫であるが、 女房は 15 歳下の 27 歳である。しかし、元文 6 (1741) 年の嫁入りである なら、こちらは後妻と思われる。
13 55	送り書	戌正月十三 日		上塩尻村	勘五郎	加助殿女 子			庄屋 七 右衛門・ 徳左衛門	秋和村	平七妻	神宗二面当村長昌寺	嫁助	嘉助	春原	源之丞 2 (源六)・2 で宝暦 9 (1759) 年に 48 歳で娘にちゆう 8 歳でいる。 明和 4 (1767) 年に 16 歳で、後はたどれないが。
14 57	覚	卯正月 10 日		上塩尻村	勘五郎	久四郎殿 女子	ろく		庄屋 徳 左衛門 ⑩・七右 三之助妻 新門⑩	秋和村	佐左衛門作 三之助妻	神宗長昌寺	嫁出	久四郎	春原	家系図 2-3、女房は 13 歳下で宝暦 7 (1757) 年時点で 36 歳。
15 80		丑正月 13 日		上塩尻村	勘五郎	和助妻			坂木御領 中之状村	坂木御領 中之状村	安右衛門殿 妹	安右衛門殿	嫁縁戻し	和助	春原	宝暦 7 (1757) 年家系図市左衛門・4 和助 26 歳男子として登場。女房は 3 歳 年下の 33 歳。ところが宝暦 13 (1783) 年に 1 歳年下の女房に。宝暦 12 (1782) 年に難縁し、新たな女房をむかえたか。あるいは記載の誤りを訂正したか。

表 3 つづき

参照 番号	文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し 元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し 場所	送り出し 先名主	送り出し 先宗旨	異動事由	上塩尻 対象者	マケ	家系図考察
16	145	春原上口上 書之御事	子正月7日	上塩尻村	文藏・龍 正院	文藏・龍 正院				伊勢参宮	伊勢抜け		同宗本海野 奥興寺	久次郎 (久・休 治郎)	春原	春原左次右衛門系に近いと思われるが、行商などであり定着しなかったか。かろうじて、宝暦 11 (1761) 年に文藏後家が 70 歳で登場する。
17	146	泰順上口上 書之御事	子2月10日	上塩尻村		久次良妹			神宗松城 領新地村 耕雲寺	堀村	善助妻			久次郎 (久・休 治郎)	春原	春原左次右衛門系に近いと思われるが、行商などであり定着しなかったか。かろうじて、宝暦 11 (1761) 年に文藏後家が 70 歳で登場する。
18	158		子2月28日	上塩尻村			加助			江戸御屋 敏			野村七兵衛	嘉助 (又 次郎)	春原	源之丞 2 (源六) 2 で宝暦 9 (1759) 年に 48 歳で娘にちゆう 8 歳でいる。明和 4 (1767) 年に 16 歳で、後はたどれないが。
19	163		子2月	上塩尻村			文藏			江戸	本村木町三 丁目嶋屋金 兵衛方			文藏	春原	春原左次右衛門系に近いと思われるが、行商などであり定着しなかったか。かろうじて、宝暦 11 (1761) 年に文藏後家が 70 歳で登場する。
20	159	指上申御請 状之事	享保 17 年子 2月	上塩尻村			権八			城戸村	津久井定右 衛門縁			権八 (甚 右衛門) の祖先?	春原	宝暦 13 (1763) 年 (付箋) 春原家系図惣右衛門 3 として甚右衛門 26 歳筆頭者は 0.54 貫で登場。それ以前は権八、もっとも、娘とりというのはおそらく先代。
21	34		正月16日	上塩尻村		治左衛門 女子				松代領新 地村?	清七弟三四 郎妻		松城領新地 村耕雲寺	治左衛門	春原	宝暦 7 (1757) 年孫右衛門 32 歳男子は天明 3 (1783) 年までには治左衛門 58 歳筆頭者。後の姉妹および娘に該当する女子、宗門改帳には見られず。
22	61		正月8日	上塩尻村		泰右衛門 殿娘				岡村?	清左衛門弟 半兵衛妻		浄土宗岡村 宗安寺	泰右衛門 (藤兵衛)	春原	家系図惣右衛門 3 泰右衛門は天明 3 (1783) 年 78 歳で登場するまでは藤兵衛で出ており、娘の記載はない。

右衛門：春原家系図惣右衛門-3) として宝暦 13 (1763) 年宗門改帳に甚右衛門 26 歳筆頭者として登場する者の祖先、おそらく父親であろうと推測する。もう 1 件は、参照番号 128 番の元文 6 (1741) 年酉正月に林之郷庄屋七左衛から筑後女子きく 27 歳 (上青木村禅宗龍洞院) を喜八殿妻に、と送り出したものである。なお、喜八とは宝暦 7 (1757) 年家系図喜八-1 六太 42 歳従弟として貫高 0.846 貫とあり、元文 6 年から 16 年後の宝暦 7 年にはその女房が 27 歳とあるので、こちらは後妻と思われる。もう 1 件、年代の記載があるのは、135 番の宝暦 4 (1754) 年戌正月 9 日長瀬村庄屋市左衛門からの送り状で、同村小四郎娘まつ 17 歳 (岩村田御領飯沼村禅宗龍願寺) が上塩尻村惣助殿従弟又次郎 (源之丞 2 (源六)-2) 妻に嫁入りした。又次郎は宝暦 9 (1759) 年に 48 歳で娘にちゆう 8 歳がいる。

他の 19 件は干支のみ記載がある。もっともこれらの状の送り月は年号がわかっているものも含めて正月がほとんどで、そうでないのは 12 番の「覚」であり、酉 4 月に本郷村庄屋彦兵衛から久蔵妹へん 25 歳 (真言宗西前山村中禅寺) を上塩尻村の幸八殿妻 (真言宗東福寺) へとしたものである。なお、幸八という名前が宗門改帳に登場するのは、天明 8 (1788) 年 64 歳、太七 72 歳の弟として。その時点で女房は 60 歳であり、これが久蔵妹へんであると思われる (天明 3 年参照番号 82)。してみると、この送り状は 1747 年頃のものとなる。

外から上塩尻村に送られてきた事例は 12 件であり、反対に上塩尻村から出て行った事例は 10 件である。外から来たというのは、下塩尻村が 3 件、秋和村が 2 件、鼠宿村 2 件、あとは中之条村・房山村・本郷村・長瀬村・林之郷である。近隣村が多い。上塩尻村から出て行ったのは秋和村は 2 件、中之条村・堀村・城戸村・岡村・新地村と領内に加え、江戸に 2 件、また転出ではないが、伊勢抜けである。

春原とされる家系は、大村にも若干屋敷地をもつが、あらや（荒屋）にまともって居住する。18世紀前半でも着々とその軒数を増やしていたものと容易に想像しうる。そもそも春原と書いて「すのはら」と読ませるのは、信州北東に広がる族名であるが、上塩尻村の場合には千曲川の中州（なかす）で野菜や桑を生育させ商品として出荷する生業の集団をこの名前で束ねたものではあるまいか、と筆者は仮説を立てている。この「同族」としてのまとまりは希薄であるように映じるが、一方で、この時期は内外との往来が最も頻繁であったという傍証になると思われる。

【佐藤家】（表4）

佐藤家は20件をかぞえ、もともと人口の多い春原家にくらべ後年に至るまで影響力は村最大で別格であり続けるものの、人数としては最大ではない。しかし、とくに遠隔における同格の縁組を意識的にこなっていたものと思われる。ここでの件数の大きさもその表れと見なしうる。もっとも、この時期は、いわゆる庄兵衛一件のあとで、であればこそ清水助五郎が庄屋を勤めているのである。一件がどの程度影響していたのか不明ではあるものの、後年の佐藤家にはあまり見られない状況であるとも言える。したがって出入りに関して言えば、上塩尻村から出て行く事例が13件、入ってくる事例が7件と出超である。もっとも、出て行く事例13件のうち6件が平左衛門に関する事例である。男子について2件は既に平三郎および半平の事例で先述した。そもそも、平左衛門本人が、参照番号144で見えるように奉願上口上書之御事として、某年子正月6日江戸京橋壱丁目甲州屋半左衛門所たばこ売参として、江戸へタバコ売りに出ている。その稼業で現金収入を得ているものと判断する。佐藤女子で見ると、参照番号41で引取状之事として、宝暦四（1754）戊年正月平左衛門女子ちよが、和田宿郷右衛門倅清之丞（真言宗当村菩薩寺）妻として出ている。

なお、平左衛門は宝暦7（1757）年に50歳であり、貫高は2.14貫である。参照番号162で奉指上注進書之御事として、某年子11月平左衛門は押印の上で、妻であったと思われるが、松代領網掛村弥左兵衛の娘を離縁戻しとしている。加えて参照番号93は某年辰正月11日平左衛門の妹が馬越村林藤四郎倅良助妻（禅宗当村東昌寺）として嫁出をした。

さらに言えば、入る方でも平左衛門の関わる事例が2件あり、出入り全体で20件の4割平左衛門関係ということで、特定の人物が多く件数を稼ぐ事例である。参照番号102で一札之事とし、享保18（1733）年丑11月松平九郎左衛門支配所和田村郷右衛門娘（真言宗菩薩寺）を平左衛門は妻に迎えており、村出の方で述べたように、彼の娘が郷右衛門倅に嫁入りしているのは、姻戚同士の婚姻ということになる。また、参照番号148で乍恐奉願口上書之御事として、某年子正月日に松城領鼠宿金太郎娘（禅宗松城領新地村耕雲寺）を妻として迎えているが（平左衛門娘）これも前段で述べたように松代領網掛村弥左兵衛の娘を離縁戻ししているのは別人である。平左衛門関係はとにかく出入りが多い。

【馬場家】（表5）

馬場家の出入りを見ると、出て行ったのが9件、入ってきたのが6件である。その内実は、参照番号160番で某年子11月馬場家系図14-3伝右衛門が、江戸の久保天徳寺門前万屋清兵衛方までタバコ売りに出ている。これは先述の平左衛門とは子年では一致を見るが、平左衛門が6月京橋へ向かったのに対して、こちらは11月である。また、18歳の開きがあり、こちらはずっと若年である。この伝右衛門は、宝暦9（1759）年、馬場家系図14-3として養子に入った三次郎が宝暦11（1761）年に男子36歳としてあり、衛右衛門後家を女房28歳としてもつ。そして宝暦13年までには消失する。2件が離縁戻しまたは返しである。参照番号71覚で某年戊正月21日馬場家系図2-2半五郎女房を下

表 4 佐藤家

参照 番号	文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し 元名主	出自	名前	年齢	山・宗・旨	場所	送り出し 先名主	送り出し 先	興動事由	上座兄 対象者	マケ	家系図考察
1 7	送り送書	子正月13日		上塩尻村	助五郎	義仲・桑助 殿妻				秋和村	七右衛門 ⑩・徳左衛 門	彦兵衛方	雌縁	桑助(城助)	佐藤	家系図 1-13 軍蔵としても登場。宝暦7年時点の女房25歳はその後継く ので、ことは別人
2 14	一札之事	寛保3年戊 二月	1742	上塩尻村	助五郎	殿妻				小里郡和 田村	彦右衛門⑩ 半兵衛⑩	彦右衛門娘 清之兵衛	雌縁引き 取り	庄右衛門	佐藤	佐藤家系図 2-4、筆頭者八右衛門の兄として登場。宝暦7(1757)年 45歳の時点で妻なし。
3 41	引取休之事	宝暦四戊年 正月	1754	上塩尻村	助五郎	平左衛門 女子	ちよ			御料和田 宿	郷右衛門 清之兵衛	真言宗当村 菩提寺	嫁出	平左衛門 (39と同じ)	佐藤	宝暦7(1757)年段階では本人は家系図で確認できない。が男子要吉4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。平三郎は 14 年前に養子出。
4 92	乍急願之通 被印付可被 下帳	子12月		上塩尻村	⑩・蔵右 衛門⑩	平左衛門 弟	半平	20	松城領新 地村耕雲 寺	坂木御料 橋尾村	基四郎養子 村耕雲寺	松城領新地 村耕雲寺	養子出し	平左衛門 (39と同じ)	佐藤	半平は出現せず。平左衛門にしても宝暦7(1757)年段階では本人は家 系図で確認できない。が男子要吉4歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。平三郎は14 年前に養子出。
5 144	泰願上口上 書之御事	子正月6日		上塩尻村		平左衛門				江戸京橋 徳丁目	中州屋平左衛門所たは こ虎参	江戸へタ バコ売り	江戸へタ バコ売り	平左衛門 (39と同じ)	佐藤	半平は出現せず。平左衛門にしても宝暦7(1757)年段階では本人は家 系図で確認できない。が男子要吉4歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。平三郎は14 年前に養子出。
6 154	乍急泰願口 上書之御事	子正月23日		上塩尻村		蔵右衛門 女房		26	浄土真宗 新西向源 寺			神宗松城領 耕雲寺	寺變更	普右衛門	佐藤	宝暦7(1757)年段階では本人は家系図で確認できない。が男子要吉4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。平三郎は 14 年前に養子出。
7 162	泰指上注通 書之御事	子11月		上塩尻村			平左衛 門印			松城領綱 掛村	松城領綱掛村弥左兵衛 (娘)	雌縁戻し	雌縁戻し	平左衛門	佐藤	宝暦7(1757)年段階では本人は家系図で確認できない。が男子要吉4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。平三郎は 14 年前に養子出。
8 23	返状之事	宝暦11年巳 ノ正月12日	1761	上塩尻村	助五郎	半弥蔵娘				中之条村	頼右衛門方 江妻	橋尾村神宗 耕雲寺	嫁出	半弥	佐藤	家系図 3-2 にあたる。宝暦7(1757)年時点で73歳。ただし、娘が登 場しない。
9 39	寛	延享2年丑 正月	1745	上塩尻村	助五郎	平左衛門 殿弟	平三郎	23		坂木領綱 尾村	基四郎⑩ 子	五郎兵衛養 子	養子出し	平左衛門	佐藤	宝暦7(1757)年段階では本人は家系図で確認できない。が男子要吉4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。平三郎は 14 年前に養子出。
10 53	寛	西正月14日		上塩尻村	助五郎	蔵右衛門 姫	れん	18	松城御領 新地村神 宗耕雲寺		小右衛門殿 藏		嫁出「加 平次娘返 状之義致 失念」	普右衛門	佐藤	
11 93		辰正月11日		上塩尻村	助五郎	平左衛門 殿妹				馬越村	庄屋 文 四郎⑩	林蔵四郎仲 良助妻	嫁出	平左衛門 (39と同じ)	佐藤	宝暦7(1757)年段階では本人は家系図で確認できない。が男子要吉4 歳は家系図 7-3 であるので、家系図 7-2 でよいと思われる。平三郎は 14 年前に養子出。
12 136		子11月日		上塩尻村	助五郎	八右衛門 殿妻				福田村	庄屋 平 四郎⑩	平四郎娘	雌縁戻し	八右衛門	佐藤	宝暦7(1757)年佐藤家系図 2-4 八右衛門36歳は佐藤家分家筆頭で は筆頭者であったが、その時点で女房はおらず、宝暦9(1759)年になり 38歳で、27歳という11歳下の女房をもっている。
13 11	口上之事	巳12月27 日		上塩尻村	助五郎	蔵右衛門⑩・弟八兵衛(祖康衆中； 曾兵衛⑩・平次⑩・加判平左衛 門⑩)・安兵衛 ⑩				坂木領金 井村	吉郎右衛門 養子	別所村神宗 安楽寺	養子出し	蔵右衛門	佐藤	蔵右衛門はなぜか家系図に登場せず。だが、男子である家系図 12-1 仁 蔵14歳(後継郎)は確認。なお、八兵衛は宝暦7(1757)年時点では 宗門殿に登場せず。他の兄弟である、曾兵衛⑩・平次⑩は登場。
14 20	寛	巳正月四日		鍛冶町	年寄 八 右衛門⑩	助七後家 娘	すめ	22	神宗元海(祖康衆中； 野真草寺	上塩尻村	助五郎	武八殿妻	嫁入	武八	佐藤	佐藤家系図 5-3 普左衛門は宝暦7(1757)年時点では筆頭者松治郎 27 歳で、宝暦11(1761)年31歳までには女房22歳を迎えている。宝暦 14(1764)年には普左衛門34歳で現れ、明和7(1771)に佐藤武八、 貫高 0.39 貫で登場。
15 109	送状之事	享保19年寅 12月		和田村		郷右衛門 ⑩	てう	17	真言宗普 徳寺	上塩尻村	助五郎	庄右衛門妻	嫁入り	庄右衛門	佐藤	佐藤家系図 2-4、筆頭者八右衛門の兄として登場。宝暦7(1757)年 45歳の時点で妻なし。

表 4 つづき

参照 番号	文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し 元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し 場所	送り出し 先名主	送り出し 先	送り出し 先宗旨	興動事由	上塩尻 対象者	マケ	家系図考察
16	131 覚	卯正月 9 日		下塩尻村	庄屋 半 右衛門	忠之丞女 子	のう	19	禪宗永城 領新地村 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	半弥殿作松 右衛門殿妻		嫁入り	松右衛門・ 半弥 (茂太 郎)	佐藤	佐藤家系図 3.3 として、上位分家であるが、そう言えば、宝暦 7 (1757) 年茂太郎 27 歳男子、貴高 1113 貫であるが宗門改帳上では女房を最後まで見えない。
17	104 覚	亥正月 11 日		下之郷村	庄屋 伝 左衛門	久左衛門 姫	すへ	23	真言宗下 之郷神宮 寺	上塩尻村	助五郎	八郎兵衛殿 妻		嫁入り	八郎兵衛	佐藤	宝暦 7 (1757) 年家系図には現れないが佐藤家系図 4.3 清左衛門 37 歳の兄 45 歳として登場。宝暦 7 (1757) 年には、女房は 10 歳年下の 35 歳。
18	148 作忍・奉願口 上替之御事	子正月 日		松城福鼠 宿		金太郎娘			禪宗永城 領新地村 耕雲寺	上塩尻村		平左衛門卿 新地村耕雲 寺		嫁入り	平左衛門 (39 と同じ)	佐藤	半平は出現せず。平左衛門にしても宝暦 7 (1757) 年段階では本人は家系図で確認できない。が男子要吉 4 歳は家系図 7.3 であるので、家系図 7.2 でよいと思われる。平三郎は 14 年前に養子出。
19	33 送り書之事	宝暦十四年 年 3 月	1764	松代領新 地村 ㊤	新右衛門 ㊤	冠右衛門	丈助 28・女 房 21・いと 3		禪宗耕雲 寺	上塩尻村	助五郎	源平次殿方江型養子		夫婦子型 養子入り	丈助・女 房・いと	佐藤	宝暦 14 (1764) 年の宗門改帳付箋に反映 (付箋) 「期 29 丈助」「年 22 女房」「姓 3 いと」
20	102 一札之事	享保 18 丑 11 月	1733	松平九郎 左衛門又 肥所和田 ㊤ 村	郷右衛門 ㊤	郷右衛門 領			真言宗普 藏寺	上塩尻村	助五郎	平左衛門妻		嫁入り	平左衛門 (39 と同じ)	佐藤	宝暦 7 (1757) 年段階では本人は家系図で確認できない。が男子要吉 4 歳は家系図 7.3 であるので、家系図 7.2 でよいと思われる。平三郎は 14 年前に養子出。

塩尻村清七 (芳泉寺) へと離縁戻し、そして参照番号 24 覚で某年辰 3 月次郎八妻が諏方形村兄六兵衛方江相戻し、離縁返しとしている。なお、馬場家の次郎八は宝暦 7 (1757) 年宗門改帳に治郎八 35 歳、筆頭者の甥としてあり、明和 4 年 (1767) 年 45 歳、筆頭者忠兵衛 70 歳の男子として登場するが、その後天明 3 年宗門帳では消失している。他の 9 件は標準的な嫁出となる。地理的分布は、下塩尻が 2 件、秋和が 1 件・鼠宿が 1 件と近隣のものもあるが、永瀬村・金井村・諏方形村・大久保村と少し広がりを見せるのである。

また、入ってきた事例の 6 件はすべて通常の嫁入りである。下塩尻 2 件、秋和 1 件、で新町・生塚・埴科と最後の埴科を除けば比較的近隣の縁組と言える。

【山崎家】(表 6)

山崎家 14 件の事例で見ると、出入同じ 7 件ずつである。出て行った先は、嫁入り先として下塩尻村・秋和の両隣村が 1 件ずつ、領内で諏訪部村・岩門村・原町・金井村に 1 件ずつ、また鼠宿村で 1 件である。なお、参照番号 95 返書として、某年亥正月十日五郎右衛門殿男子平三郎殿妻を、秋和村金之丞 (禪宗長昌寺) の許へ離縁する、というものである。この平三郎は先の佐藤家の平三郎が以前に養子として出て行っているために、通常同村内に同じ名前は見つからないという原則には抵触しない。この平三郎は山崎家系図 5-1 五郎右衛門の息子である平三郎 47 歳である。この平三郎は宝暦 9 (1759) 年に三郎右衛門になるが、先代より早く宝暦 13 (1763) 年に 53 歳で死亡する。その女房は 14 歳年下で、そのとき 39 歳である。宝暦 14 (1764) 年後家になるが、明和 3 (1766) 年までには消失。ということで、ここで離縁された秋和村金之丞姉は宝暦 9 年以前に平三郎の妻であったものと見なせる。そして、入りの 7 件のうち参照番号 65 で子 5 月 12 日常田村勘助殿抱はつが五郎右衛門忤平三郎妻になったとあり、

表 5 馬場家

参照 番号	文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し 元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し 場所	送り出し 先名主	送り出し 義右衛門殿 娘	異動事由	上塩尻 対象者	マケ	家系図考察
1 86	御根	西正月 13 日		下塩尻村	庄屋 太郎	万 源七郎	あき	17	浄土宗すわべ村芳泉寺	上塩尻村	助五郎	義右衛門殿娘	嫁入り	半五郎 (義右衛門) 71	馬場	宝暦 7 (1757) 年家系図 2・2 半五郎 44 歳兼通者として 0.352 貫で登場。女房は 35 歳なので、17 年前の 1740 年の嫁入りか。
2 121	寛	西正月 9 日		下塩尻村	庄屋 右衛門	半 文右衛門孫	さん	19	神宗松城領新地村耕雲寺	上塩尻村	助五郎	六兵衛殿娘	嫁入り	六兵衛	馬場	宝暦 14 (1764) 年・明和 3 (1766) 年時点で娘は登場せず。この六兵衛も家系図に登場しない。
3 106	送り状之事	寛保 3 年 亥正月 16 日	1743	御料所坂木村	安兵衛⑥	組下新町市之丞娘		18	当村神宗満泉寺	上塩尻村	助五郎	半右衛門殿子忠武平次妻	嫁入り	六太 (半右衛門名義)	馬場	宝暦 7 (1757) 年家系図 6・2 六太 31 歳男として半右衛門名義の 0.902 貫を保持。女房はその時点で 1 歳上の 32 歳。
4 32	送状一札之事	宝暦 貳 年 申正月 日	1752	坂本料理種部下戸倉村	十郎 右衛門⑥	五左衛門娘	しを	19 賀之十九	浄土宗当村宗安寺	上塩尻村	介五郎	大右衛門と中仁之方江縁付		大右衛門	馬場	宝暦 7 (1757) 年馬場家系図 2・2 年五郎 44 歳が兼通者であるユニットの伯父で家系図に現れない大右衛門 70 歳伯父にはその息子であったと思われるが家系図 14・3 衛右衛門後家が息子である家系図 14・3 八三郎 4 歳従弟とあった。この後家がここでのしをと思われる。年齢が合う。
5 120	寛	西正月 11 日		秋和村	庄屋 清右衛門⑥	權平妹	とめ	17	神宗秋和村龍沢寺	上塩尻村	助五郎	半右衛門殿仲武兵衛殿妻	嫁入り	武兵衛	馬場	宝暦 7 (1757) 年家系図には現れないが武兵衛 45 歳兼通者としてであり、女房はその時点で 10 歳下の 35 歳。したがって嫁入りは 18 年前の 1729 年頃。
6 142	寛	西正月		生家村	庄屋 宇兵衛⑥	三右衛門姉	はな	30	秋和村神宗長昌寺	上塩尻村	助五郎	義右衛門殿妻	嫁入り	幸右衛門	馬場?	
7 147	乍忠義領上口上書之御事	子正月 23 日		上塩尻村		六助娘		20	神宗松城領新地村耕雲寺	永瀬村		惣右妻	嫁出	又治郎 (六助-4)	馬場	宝暦 7 (1757) 年家系図六助-4 又治郎 33 歳従弟がこれにあたるか。もともと、該当する娘はおらず先代の可能性高し。
8 71	寛	戌正月 21 日		上塩尻村	助五郎	半五郎女房		18	芳泉寺	下塩尻村	清七	芳泉寺	嫁入り	半五郎	馬場	宝暦 7 (1757) 年家系図 2・2 半五郎 44 歳兼通者として 0.352 貫で登場。女房は 35 歳なので、17 年前の 1740 年の嫁入りか。
9 64	御根	正月 16 日		上塩尻村	助五郎	六兵衛殿娘			長兵衛娘	下塩尻村	万右衛門郎⑥	長兵衛娘	嫁出	六兵衛	馬場	宝暦 14 (1764) 年・明和 3 (1766) 年時点で娘は登場せず。この六兵衛も家系図に登場しない。
10 160		子 11 月		上塩尻村			佐右衛門印		久保天徳寺門前万屋清兵衛方	江戸			江戸へタバコ売り	佐右衛門 (三次郎)	馬場	宝暦 9 (1759) 年、馬場家系図 14・3 として兼子に入った三次郎は宝暦 11 (1761) 年に男子 36 歳としてあり、衛右衛門後家を女房として、その時点で 28 歳としてもつ。もともと、従弟にはまっつはおらず、すぎが宝暦 11 (1761) 年に 18 歳である。そして宝暦 13 年までには消失する。
11 153	乍忠義領口上書之御事	子正月 23 日		上塩尻村		第五左衛門弟伝内後家女子つき 16		40	浄土宗諏訪村芳泉寺	塩本領金井村		新七妻子	嫁出 (子連れ)	第五左衛門	馬場	
12 129	寛	子正月 13 日		上塩尻村	助五郎	伝右衛門殿従弟	まっつ	18	七衛門金平妻 (判頭・徳左衛門)	秋和村		七衛門金平妻 (判頭・徳左衛門)	嫁出	佐右衛門 (三次郎)	馬場	宝暦 9 (1759) 年、馬場家系図 14・3 として兼子に入った三次郎は宝暦 11 (1761) 年に男子 36 歳としてあり、衛右衛門後家を女房として、その時点で 28 歳としてもつ。もともと、従弟にはまっつはおらず、すぎが宝暦 11 (1761) 年に 18 歳である。そして宝暦 13 年までには消失する。
13 31	寛	明和二年西ノ正月	1765	上塩尻村	助五郎	六兵衛殿娘	せん	21	伝右衛門布部兵衛子文兵衛妻	松代領風箱村	伝右衛門印	嫁出	六兵衛	馬場	宝暦 14 (1764) 年・明和 3 (1766) 年時点で娘は登場せず。この六兵衛も家系図に登場しない。	
14 24	寛	辰 3 月		上塩尻村	助五郎	次郎八殿			庄屋 平次郎⑥	諏方彩村		兄六兵衛方江相戻	継縁返し	次郎八	馬場?	宝暦 7 (1757) 年 45 歳、兼通者忠兵衛 70 歳の男子として、宗門帳に登場するが、その後天明 3 年宗門帳では消失。7 歳下の弟尊之助が宝暦 (1764) 年 35 歳の時年 29 歳の女房を迎えている。天明 3 年、尊之助は忠兵衛
15 107	寛	子正月 18 日		上塩尻村	助五郎	六助殿娘			惣右妻	大久保村		惣右妻	嫁出	又治郎 (六助-4)	馬場	宝暦 7 (1757) 年家系図六助-4 又治郎 33 歳従弟がこれにあたるか。もともと、該当する娘はおらず先代の可能性高し。

表 6 山崎家

参照番号	文書名	旧暦	西暦	村名	返り出し 元名主	出自	名前	年齢	出自宗 門	送り出し 場所	送り出し 先名主	送り出し先 伴	送り出し先 宗門	異動事由	上塩尻 別業者	マケ	家系図考察
1 65		子 5 月 12 日		常田村	庄屋兵衛	善 兵衛	勤助殿抱は つ			上塩尻村	助五郎	五郎右衛門 伴平三郎妻	諏訪郡村浄 土宗芳嚴寺	嫁入り	平三郎	山崎	家系図 5-1 五郎右衛門の息子である平三郎 47 歳男子は宝暦 9 (1759) 年に三郎右衛門になるが、先代より早く宝暦 13 (1763) 年に 53 歳で死にます。その女房は 14 歳下で、そのとき 39 歳である。宝暦 14 (1764) 年後家になるが、明和 3 (1766) 年までには消失。
2 114	下鹽尻一 礼之事	元文二年巳 六月廿二日	1737	田町	町人・主 権助⑨・ 同所諸人 御兵衛⑨	文次郎	文次郎			上塩尻村	助五郎	宇右衛門様 へ御奉公		御雇	宇右衛門	山崎？ 春原？	
3 116	寛	西正月 15 日		常田村	庄屋 右衛門⑨	理 子	四郎左衛門 女子	24	神宗殿治 町月窓寺	上塩尻村	助五郎	忠之丞殿男 子忠次郎妻		嫁入り	忠次郎	山崎	忠之丞の男子として、宗門帳には忠次郎は登録せず。この時期には佐藤家に。
4 59	寛	明和 3 年戌 正月朔日	1766	下塩尻村	庄屋 右衛門	万 右衛門	御兵衛女子 ゆく	18	松城領新 地村神宗 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	忠之丞殿仲政七殿妻		嫁入り	政七	山崎	家系図 18-5 で後に忠之丞を嗣ぐ次男政七は明和 3 (1766) 年の宗門改帳では要助 22 歳男子とあり、翌明和 4 年も同名である。政七 39 歳としてあるのは天明 3 (1783) 年になってから。
5 37	寛	寅正月 8 日		下塩尻村	庄屋 兵衛⑨	十 兵衛	幸之丞徒弟 はな	24	松城領新 地村神宗 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	善太郎殿妻		嫁入り	善太郎	山崎	宝暦 7 (1757) 年家系図 8-1 善太郎 53 歳男と女房 35 歳で登場
6 62	送り一礼 之事	宝暦 11 年巳 正月	1761	細科井坂木村	弥次右衛 門⑨	与五兵衛娘 れん	れん	29	神宗満泉 寺	上塩尻村	助五郎	清五郎殿男子文右衛門 殿妻		嫁入り	清五郎 (文 右衛門)	山崎	家系図 21-2 別々清五郎は、宝暦 7 (1757) 年時点で太部 8 30 歳が筆頭者であるが「代判四五右衛門 三年以前丑二月江戸へ久落仕奉順」で、文右衛門 33 歳男子であったが、宝暦 9 (1759) 年に先妻を亡くし、この時期に 29 歳の妻を迎えている。
7 26	一礼之事	宝暦六年子 正月	1756	坂木御料同村	与四郎⑨	□頭娘	みね	22	坂木村耕 宗満泉寺	上塩尻村	助五郎	細七伴三之 助妻		嫁入	三之助	山崎	家系図 6-1
8 49	寛	寛保二年戌 正月	1742	上塩尻村	助五郎	宇兵衛殿娘 よめ	よめ	28	坂木領金 井村	上塩尻村	忠右衛門 ⑨	安之丞弟金 右衛門妻	細尾村耕雲 寺	嫁出	宇兵衛	山崎	家系図には登録せず。それ以前はたどれず、天明 3 (1783) 年に山崎家系図 6-2 娘七の徒弟として 60 歳で登場する。
9 100	寛	寛保 3 年亥 正月 12 日	1743	上塩尻村	助五郎	五郎右衛門殿伴平 三郎殿女房		24		鼠宿村	庄屋 市郎兵衛⑨	平三郎 (65 と同じ)	離縁戻し		平三郎 (65 と同じ)	山崎	家系図 5-1 五郎右衛門の息子である平三郎 47 歳男子は宝暦 9 (1759) 年に三郎右衛門になるが、先代より早く宝暦 13 (1763) 年に 53 歳で死にます。その女房は 14 歳下で、そのとき 39 歳である。宝暦 14 (1764) 年後家になるが、明和 3 (1766) 年までには消失。
10 78	寛	辰 2 月 19 日		上塩尻村	助五郎	五郎右衛門 娘	もと	27		原町	当番町屋 宗兵衛⑨	三右衛門妻	浄土真宗新 町向源寺	嫁出	五郎右衛門	山崎	宝暦 7 (1757) 年家系図 5-1 五郎右衛門 77 歳筆頭者として 2501 貫でいいる。娘の嫁入りはかなり前と思われる。
11 95	返書	家正月十日		上塩尻村	助五郎	五郎右衛門 殿男子 平三郎殿妻				秋木村		金之丞姉	神宗長昌寺	離縁	平三郎 (65 と同じ)	山崎	家系図 5-1 五郎右衛門の息子である平三郎 47 歳男子は宝暦 9 (1759) 年に三郎右衛門になるが、先代より早く宝暦 13 (1763) 年に 53 歳で死にます。その女房は 14 歳下で、そのとき 39 歳である。宝暦 14 (1764) 年後家になるが、明和 3 (1766) 年までには消失。
12 91		申正月 9 日		上塩尻村	助五郎	左五右衛門 殿娘	あき	19		岩門村	庄屋 庄 右衛門	藤藏伴万右 衛門妻	伊勢山村樺 宗満泰寺	嫁出	佐五右衛門 (四五右衛 門)	山崎	宝暦 7 (1757) 年家系図には現れないが佐五右衛門系統として四五右衛門 48 歳筆頭者として 1284 貫で登場。息子岩太郎が佐五右衛門貫高を嗣ぐが、この時点で 18 歳でこの娘とはおそろくその姉妹。
13 98	寛	子正月 7 日		上塩尻村	助五郎	左五右衛門 娘				下塩尻村	庄屋 万 右衛門⑨	仁右衛門伴 吉右衛門妻	浄土宗芳泉 寺	嫁出 (こ 家子)	佐五右衛門 (四五右衛 門)	山崎	宝暦 7 (1757) 年家系図には現れないが佐五右衛門系統として四五右衛門 48 歳筆頭者として 1284 貫で登場。息子岩太郎が佐五右衛門貫高を嗣ぐが、この時点で 18 歳でこの娘とはおそろくその姉妹。
14 40	泰順條口 上伴之御 事	宝暦六年	1756	上塩尻村	助五郎(須 原清之丞・ 水助・利 兵衛)	忠之丞娘 とり	とり		諏訪郡村 浄土宗芳 泉寺			浅井善助殿 妻		嫁出 (こ 家子)	忠之丞	山崎	家系図 18-4 宝暦 7 (1757) 年 52 歳

このはつであると推測される。「抱（かかえ）」というのは奉公人か。同じく入り7件の1つで、参照番号114下請状一札之事として、元文二（1737）年巳6月22日田町 町人主権助および請人勘兵衛から文次郎（浄土宗ニ而同町浄宮寺）が山崎家の宇右衛門様へ御奉公とある。なお、山崎家に入ってきた他の5件は、もう1件常田村と下塩尻村が2件、さらに坂本から2件である。馬場家とは分布する方向は違うが、比較的隣近での縁組・奉公入りである。

【滝澤家・塚田家】（表7）

滝澤家としてあるのは10件である。もっとも、この18世紀前半の段階でも滝澤家と塚田家とは混在している。区別がしがたいのである。この宗旨送り状としてまとまるこれらの文書で、1件のみ上塩尻村内部での縁組がなされている事例でもある。宗門改のための宗旨が問題であるため、同じ村内での「異動」には矛盾はない。参照番号6の覚で、某年卯正月10日上塩尻村源蔵（馬場）に茂兵衛殿従弟おひさ26が村寺の曹洞宗東福寺から源蔵の檀那寺が諏訪部村浄土宗芳泉寺であるためにこの送り状が作成された。なお、この茂兵衛は名前からして滝澤であるが、同時に塚田でもありうる。したがって、参照番号36覚で先の事例とは異なるがやはり某年の申正月11日茂兵衛従弟さつ20歳が下塩尻村孫右衛門姫平之丞妻になる際も嫁ぎ先がやはり宗旨違いの諏訪部村浄土宗芳泉寺になるからという理屈である。もっとも村も隣接するとはいえず下塩尻村と別になるのだが。「さつ」は宗門帳に現れない。この茂兵衛も家系図に現れず。明和3（1766）年77歳で（付箋）「去正月相果申候」。その宗門改帳は天明3年参照番号67でこれは塚田に分類されるのである。

あらためて上塩尻村から出ていったのは先の茂兵衛従弟おひさを含めて7件で、隣接する秋和村・鼠宿村・大久保村・山口村に中之条村である。なお、中之条村では2件あり、1件は参照番号97で、覚として延享5（1748）年辰正

月9日に伴七殿娘が坂木領中之条村の文助倅弥吉妻（浄土宗当村西倉寺）に嫁いだ。もっとも記録としては、天明3（1783）年瀧澤家系図1-4善六49歳筆頭者まで伴七名義の貫高0.793貫は存在したが請負人が見出せず。年齢からして彼の娘ではないと思われる。滝澤とわかるだけである。もう1件は離縁で、参照番号96塚田安右衛門妹を離縁すると坂木領中之条村八右衛門からの状でこれ以上のことはわからない。この場合も塚田は滝澤系統の塚田ということになる。

上塩尻村に入ってきた方は、大久保村が2件、鼠宿が1件と3件のみであり、鼠宿の事例は離縁戻しである。参照番号50で送り状として、宝暦12（1762）年午正月に、松代領鼠宿村藤七妻を離縁し、金平殿娘として離縁戻し（「利縁」）をした。この瀧澤家系図2-2金平は初出が天明3（1783）年であるが、その時点で65歳である。また貫高は0.86貫程度で以前から続いている。

【清水家】（表8）

清水家の事例は7件で、出たのが4件、入ってきたのが3件である。出て行った1件は離縁で、参照番号16、乍恐以口上書を御注進申上候御事として、某年亥正月に、清水家系図1-7か、助左衛門の妻19歳が親元である坂木御料中之条村伝兵衛に送り返している。なお、特定がむずかしく、宗門改帳に天明3年助左衛門として現れる万太郎（家系図1-8）は宝暦7（1757）年時点で男子11歳。その時点で筆頭者は文太郎（家系図3-4）28歳で女房はいない。母親は65歳である。他の出先は、下塩尻および秋和の両隣村に塩崎村がいささか遠方である。入ってきた方は、下塩尻村・中之条村・金井村とやはり距離は比較的近い縁組である。

もっとも、番外なので清水家には入らないが、清水番外（仁左衛門系）2-1半六の事例で、同一内容の書面が3通ある。何か、手続き上の齟齬があったのか念を入れたのか。参照番号2番・

表 7 滝澤・塚田家

参照 番号	文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し 元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し 場所	送り出し先 名主	送り出し先 印	送り出し 先宗旨	異動 事由	上塩尻 対象者	マケ	家系図考察
1	3	寛	子 2 月	上塩尻村	助五郎	政右衛門 妹			真言宗東 福寺	秋和村	十兵衛清 次郎妻二内 縁	七左衛門 印越左衛 門	禅宗長昌 寺	嫁出	政右衛門	滝澤	天明 3 (1783) 年参照番号 69: 肇 頭者 58 歳。
2	6	寛	卯 正 月 10 日	上塩尻村	源藏	茂兵衛殿 従弟	おひさ	26	諏訪部村 浄土宗芳 泉寺	上塩尻村	助五郎	当村吉衛門弟甚平妻		村内縁 入・出	茂兵衛	滝澤 (塚田)	家系図に登場せず。ユニット自体 は天明 3 (1783) 年参照番号 67。 しかしその従弟としてのおひさの 名前は宗門改帳に見出せず。
3	101	寛	亥 正 月 10 日	上塩尻村	助五郎	勘太郎殿 従弟	はつ			大久保村	庄屋 安右 衛門⑥	安右衛門 仲重兵衛 妻		嫁出	勘太郎	滝澤	宝暦 9 (1759) 年滝澤佐治兵衛 3・2 勘太郎 32 歳従弟として 0.284 貫で 登場。宝暦 7 (1757) 年に、奉て(す て)に甥養子か。はつに該当する 女子は見当たらず。
4	97	寛	延享 5 年 辰 正 月 9 日	上塩尻村	助五郎	伴七殿娘				坂木領中 之条村	八右衛門⑥	文助弥弥 吉妻	佛土宗二 而当村西 倉寺	嫁出	善六 (伴 七名義)	滝澤	天明 3 (1783) 年滝澤家系図 1・4 善 六 49 歳兼頭者まで伴七名義の貫高 0.793 貫は存在したが請負人が見出 せず。年齢からして彼の娘ではな いと思われる。
5	19	寛	寛延四年 未 正 月 十一日	上塩尻村	助五郎	金次郎妹	そめ	22	禅宗二而 新地 耕雲寺	松代領狐 宿村	五右衛門⑥	藤五郎娘 二内縁	嫁出	金次郎	滝澤	宗門改帳に天明 3 年参照番号 52 ま でこの人物は登場せず。もともと、 天明 3 年時点で兼頭者金平 65 歳の 従弟として 60 歳。妹も見当たらず。	
6	79	寛	卯 正 月	上塩尻村	助五郎	政右衛門 殿姪				山口村	庄屋 喜右 衛門⑥	仁右衛門 仲市右衛 門妻	房山村禅 宗大幡寺	嫁出	政右衛門	滝澤	天明 3 (1783) 年参照番号 69: 肇 頭者 58 歳。
7	96			上塩尻村	助五郎	塚田安右 衛門妹				坂木領中 之条村	八右衛門⑥			離縁/ 出戻り	(不明)	滝澤	天明 3 (1783) 年
8	50	送り状	宝暦十式 年 正 月	松代領狐 宿村	又右衛門⑥	藤七妻				上塩尻村	助五郎	金平殿娘		離縁戻 し(「利 縁」)	金平	滝澤	滝澤家系図 2・2 金平は初出が天明 3 (1783) 年であるが、その時点で 65 歳である。また貫高は 0.86 貫程度 で以前から続いている。
9	66		巳 正 月 9 日	大久保村	庄屋 要助 ⑥	常右衛門 男子	五郎八	26	浄土宗房 山村呈蓮 寺	上塩尻村	助五郎	徳右衛門殿養子甥		婿入り	五郎八	滝澤 (塚田)	滝澤佐治兵衛 5・2 五郎八 35 歳は宝 暦 7 (1757) 年に甥養子としてあ り、女房は 30 歳。
10	76		正 月 11 日	大久保村	庄屋 要助 ⑥	常右衛門 男子	五郎八			上塩尻村	助五郎			6・6 確 認事項	五郎八	滝澤 (塚田)	滝澤佐治兵衛 5・2 五郎八 35 歳は宝 暦 7 (1757) 年に甥養子としてあ り、女房は 30 歳。
36	寛	申 正 月 11 日		上塩尻村	助五郎	茂兵衛従 弟	さつ	20		下塩尻村	庄屋 半右 衛門	孫右衛門 姉平之丞 妻	諏訪部村 浄土宗芳 泉寺	嫁出	茂兵衛	塚田	「さつ」は宗門帳に現れない。この 茂兵衛も家系図に現れず。明和 3 (1766) 年 77 歳で(付箋)「去正月 相果申帳」

表 8 清水家

参照 番号	文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し 名主	元 名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し 場所	送り出し 先名主	送り出し 先	送り出し 先宗旨	異動 事由	上塩尻 対象者	メケ	家系図考察
1	1 送状之事	宝暦 12 年 2 月	1762	金井村	武兵衛	半右	孫八娘	かつ	28	御科横尾 村 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	源右衛門 義	源右衛門	嫁入	源右衛門	清水	家系図に登場せず
2	122 寛	西正月 9 日		下塩尻村	庄屋 衛門		又四郎従弟	はつ	24	神宗松城 領新地村 耕雲寺	上塩尻村	助五郎	小兵衛 妻	小兵衛殿	嫁入り	小兵衛	清水	清水家系図 20・3 小兵衛は、天明 3 (1783) 年小左衛門 47 歳従弟としては 1 歳下の 女房 46 歳がいるが、それ以前には現れない。なお、小兵衛として宝暦 13 (1763) 年に 27 歳で登場するまでは鑑助。
3	99 送り状之 事	正月 7 日		坂水壺中 之桑村	八右衛門		伝兵衛女子	とし	19	徳士宗三 在桑村西 倉寺	上塩尻村	助五郎	助左衛門 領新地村 シ	助左衛門	嫁入り	助左衛門	清水	宗門改帳に天明 3 年助左衛門として現れる万太郎 (家系図 1.8) は宝暦 7 (1757) 年時点で男子 11 歳。その時点で筆頭者は文太郎 (家系図 3.4) 28 歳で女房はいない。 母親は 65 歳。
4	152 作是楽願 口上書之 御事	子正月 23 日		上塩尻村			久左衛門娘		20	真言宗当 村 東福寺	下塩尻村		久之丞娘	神宗松城 耕雲寺	嫁出	久左衛門	清水	
5	10 送り送書	未正月 17 日		上塩尻村	助五郎		文弥蔵従弟			真言宗東 福寺	秋和村	惣右衛門 ⑩	久兵衛弟 与九郎妻	神宗長昌 寺	嫁出	文弥	清水	家系図に登場せず。ユニット自体は天明 3 (1783) 年参照番号 73。その従弟とし ての四郎平 (家系図 13.3) 18 歳で宝暦 7 (1757) に同じユニット。
6	94 寛	巳正月 20 日		上塩尻村	助五郎		助左衛門姉	さよ		庄屋 右衛門⑩	塩崎村	庄屋 右衛門⑩	藤五郎伴 吉治郎妻	塩崎村真 言宗長合 寺	嫁出	助左衛門	清水	宗門改帳に天明 3 年助左衛門として現れる万太郎 (家系図 1.8) は宝暦 7 (1757) 年時点で男子 11 歳。その時点で筆頭者は文太郎 (家系図 3.4) 28 歳で女房はいない。 母親は 65 歳。
7	16 乍忍以口 上書之御 注進申上 候御事	家正月		上塩尻村	助五郎 (細 頭安右衛門 ⑩・四郎右 衛門⑩・茂 兵衛⑩)		助左衛門⑩ 妻		19	坂水壺料 中之桑村	坂水壺料 中之桑村	八右衛門	伝兵衛娘		離縁	助左衛門	清水	宗門改帳に天明 3 年助左衛門として現れる万太郎 (家系図 1.8) は宝暦 7 (1757) 年時点で男子 11 歳。その時点で筆頭者は文太郎 (家系図 3.4) 28 歳で女房はいない。 母親は 65 歳。

15 番・17 番で、某年亥正月 14 日坂木横町の年寄定四郎から、彦三郎妹はな 25 歳 (禅宗満泉寺) が、清水半六妻に嫁入りした。

【原家】(表 9)

原家は同族として比較的人数が少なく、ここに現れる件数も 7 件とやはり比較的少ないのは驚くにはいたらない。出て行ったのは 4 件で、行き先は隣接する秋和村に坂木村・常田村・生塚村と比較的近隣に収まる。また入ってきた事例も隣接の下塩尻村が 1 件、坂木村が 2 件である。

結 論

以上、旧上田藩上塩尻村研究史をたどりながら、現段階では最先端の研究課題としてある 18 世紀前半における通婚圏の分析に取り組んだ。この 18 世紀前半の時期は上塩尻村の基幹産業となっていく蚕種業の興隆前夜にあたり、そのときの同村における通婚圏は、展開する市場形成および労働力の移動とも密な連関を具体的に示すものとして解明が強く要望されているからである。離縁をも含めてのカウントであるものの、隣村の下塩尻村と秋和村を含む旧塩尻組で約 4 割になる。他に鼠宿と坂城が目立つ。既に宗門改帳からのデータがある 18 世紀後半の分布よりもさらに範囲が狭い感じはあるが、散開度は同様であると言える。

とくに、同族としてのまとまりは希薄ながら、千曲川に最も近い大河原・荒屋 (あらや) 集落にまとまる春原家は 163 件中 22 件と全体の 8 分の 1 を占め、その人口規模に比例させており、18 世紀前半でも着々とその軒数を増やし、千曲川の中州 (なかす) で野菜や桑を生育させ商品として出荷もする生業の集団としてこの時期内外との往来が頻繁であったとすることができ。他方、20 件と次点の佐藤家は後年に至るまで影響力は村最大で別格であり続けるものの、人数としては最大ではない。しかし、とく

表 9 原 家

参照番号	文書名	旧暦	西暦	村名	送り出し元名主	出自	名前	年齢	出自宗旨	送り出し場所	送り出し先名主	送り出し先	送り出し先宗旨	異動事由	上塩尻対象者	マケ	家系図考察
1 72	一札之事 寛保4年子 正月12日	宝保4年子 正月12日	1744	坂木村	定四郎	文平妹	まち	21	浄土宗心 光寺	上塩尻村	助五郎	伝兵衛男与平治妻	与平次 (又右衛 門)	嫁入り	与平次 (又右衛 門)	原	宝暦7(1757)年家系図7より与平次45歳従弟として4,812貫で登場。女房は34歳なので、13年前の1743年の嫁入りか。記録と合う。
2 134	送状之事	延享四年卯 正月10日	1747	坂木村	定四郎②	坂木町定 之丞娘	かん	18	当村禅宗 大英寺	上塩尻村	助五郎	与左衛門 妻		嫁入り	与左衛門	原	
3 35	覚	宝暦14年申 正月15日	1764	上塩尻村	助五郎	与平次女 子	より	17	上田御領 諏訪郡村 浄土宗芳 泉寺	坂木村	伝兵衛②	伊兵衛七 伴友吉妻 寺	神宗満泉 寺	嫁出	より(上 塩尻)	原	宝暦13(1763)年(付箋)「當正月御領坂木村猪兵衛世侍友吉妻に嫁付罷り申候」
4 54	覚	午正月		上塩尻村	助五郎	与左衛門 殿抱	はつ			常田村	庄屋 理 右衛門	徳吉侍惣 三郎妻	殿治町神 宗月窓寺		与左衛門	原	
5 77	覚	戊 正月10 日		上塩尻村	助五郎	惣兵衛殿 従弟	さん		神宗当村 龍沢寺	秋和村	庄屋 五 右衛門②	次郎妻	神宗当村 龍沢寺	嫁出	惣五郎	原	
6 132	覚	戊正月		上塩尻村	助五郎	伝之丞殿 女子	まつ	18		生塚村	庄屋 宇 兵衛②	清左衛門 仲勝之助 妻	新町佛土 真宗向源 寺	嫁出	伝之丞	原?	
7 48	覚	亥正月九日		下塩尻村	庄屋 半 右衛門	惣兵衛姪	はつ		松城御新 地村禅宗 釋雲寺	上塩尻村	助五郎	伝藏殿姫		嫁入り	傳藏	原(塚田)	宝暦11年に塚田与右衛門は傳藏名義で貫高を5,799貫持っており、対外的には傳藏だったのではないか。そしてその貫高は養子である重五郎にいき、重五郎は西原金五郎になる。

に遠隔における同格の縁組を意識的におこなっていたものと思われる。15件の馬場家および14件の山崎家となると、分布する方角は違うが、比較的近隣での縁組・奉公入りである。滝澤家としては10件であるが、本稿の対象期間である18世紀前半の段階でも滝澤家と塚田家とは混在している状況を示すとともに、他はすべて村外である中、1件のみ上塩尻村内部での縁組がなされている事例ともなっている。清水家・原家は7件と比較的件数も少ない。

夜明け前が最も暗いという。上塩尻村が蚕種業を中心に興隆し、各同族が家および本家-分家関係の成立を見せるようになる宝暦年間以前の状況を縁組から見てみると、この18世紀前半の時期は、やはり通婚圏形成前夜ということになると思われる。以上、今後の新史料発見・発掘への覚え書きとする。